



森

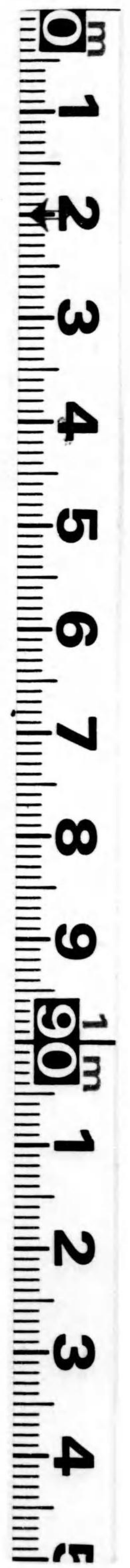
曉

紅

戲

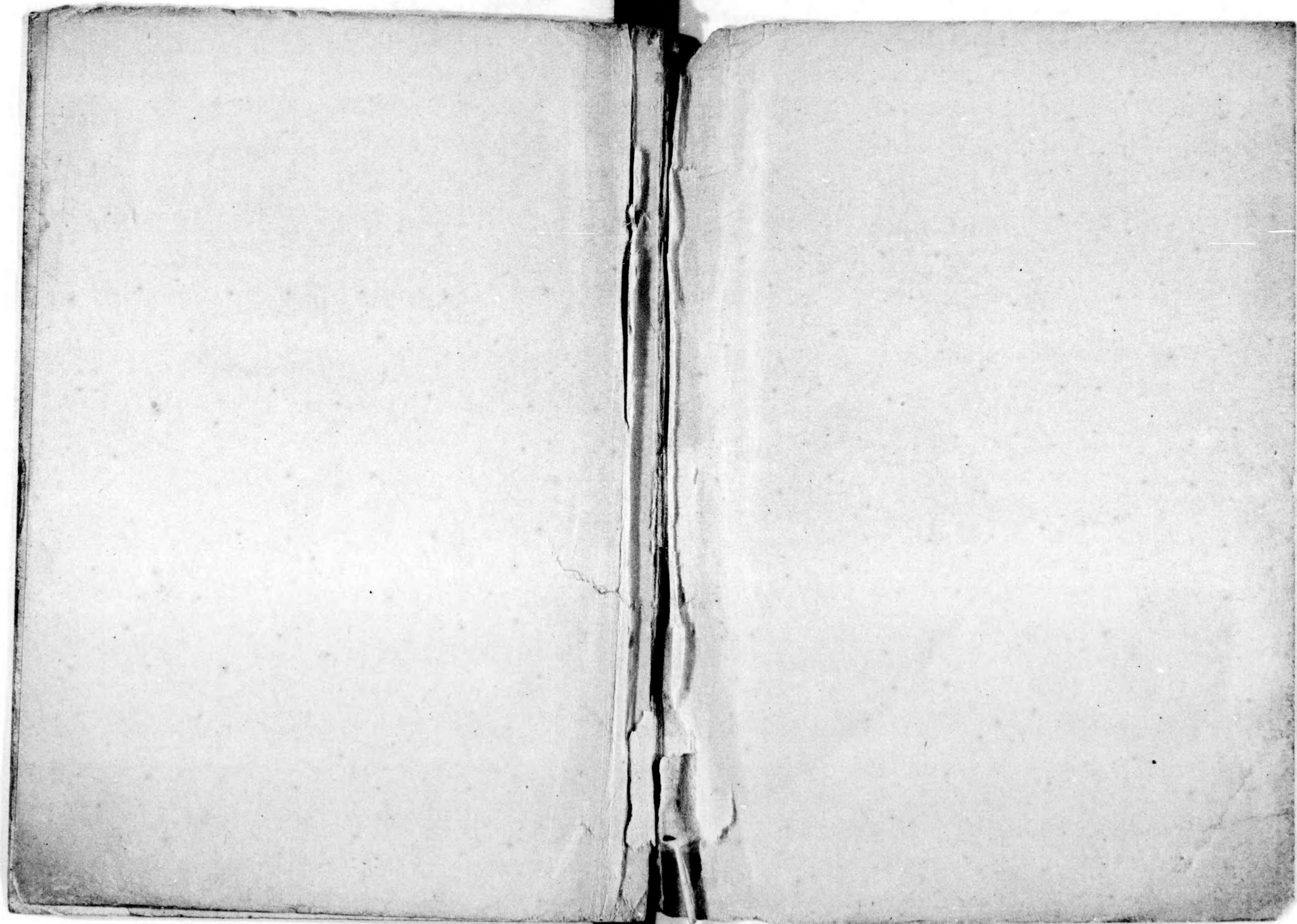
作

とほけ
行脚
へそ茶土瓶



始





特100

174



とほげ
行脚

茶土瓶

大正
8. 9. 23
内交

はしがき

川柳の點に「何につけても暇さうな臍の穴」といふのがあるが、もし臍がなかつたら、腹がノベツて餘程ヘンテコレンものだらうと想ふ。それにまた、臍の四國、臍の宿替へ、臍の宙返り、臍が茶を湧かす、とも言へば、唯見た程暇なわけもないのだらう。そこでまアどんなものだか、皆さんの臍を拜借

して、汽車で買つて来た土瓶で湧かし、まア一ツ
召上つて御覽じろといふ。

大正八年

残暑のまびしさ

淺草代地の狭い住居にて

曉紅しるす

— 次 目 —

北八ひとり旅(前編)……………一
——あの彌次さんはなぜ遅い——
北八ひとり旅(後編)……………六五
——奈良から大阪へ——
女夫さあ伊香保……………一三四
の旅
藝者と避暑々々話……………一五六
お客
同行那須のなまづ記……………一六六

— 次 目 —

修善寺手向の遊び……………一七五

いにしえ鹽原の秋……………二一〇

掛合のちうらむ記……………二二七

新編江戸砂子(江東行脚)……………二四七

一日一晚の旅……………三〇〇

— 湯本から仙石へ —

行脚へそ茶土瓶

森 曉 紅 著

北八ひさり旅

前編 あの彌次さんはなぜ遅い

旅役者花水多羅四郎の抱へ鼻之助と云つては、ハテ聞いた様な名だがと考へさせるが、其れは一九が區役所の謄本にある前名、元服して後の名は北八、ち江戸は神田の八丁堀、枋面屋彌次郎兵衛の兄

弟分と云へば、誰れだと思ふ東海道は五十三次、双六の繪にある通り者、賽の目の四でなし五でなし六でもないが愛嬌で、十返舎がふどころに生れ、昔を今に活版の世まで傳はり、義太夫のチャリ、新内のお詠へ、淨瑠璃作者が艶をつけて、吾妻路をいつしかあとに三河路やど、彼の赤坂の並木に於ては、彌次さんにはぐれてオツな聲を出し、「あの彌次さんはなぜ遅い、草鞋が切れたか門止か」など、富士松の家元が満場を唸らせる所である。

されば茲に題を假の名、何れ似た山で生捕つた梟木兎、唯當世は汽車積でゆくだけ、残る煙りが書きの種に奈良茶漬、名物の旨いわけにゆかず、大佛の眼から鼻へぬけ詣り、東京驛を振出しにころが

り出た目の參宮をしてそれから、何處へでも飛双六、伊勢の泊りは備前杉本、二見の日の出、鳥渡飛んで鳥羽の戀塚、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、宇治は茶所さまく、に、萬事心得て居るよと、先祖の枡面屋から代々道中鵜にして烏天狗の如な顔をした當代の彌次さんから案内状、暮の三十日は午後八時廿分發の伊勢直行、東京驛で待合はせて其汽車へ乗込む約束、それがそもく手違ひの序幕、のつげから北八がひとり旅と相成るの次第、是より詳しく記すと云へば北八作者に對つて曰く、くやしき記すと訂正々々。

上方贅六、關東のへげたれ、箱根の彼方にはお化が居ると、何方

でも言ふとして見れば、化は何うにも出やうがなく、塔の澤か宮の下邊りでアラ今晚はと現はれるより爲方がなからう。

鴈治郎はんの忠兵衛まア日本一やなと云へば、直侍は出来めえと羽左衛門最員が啖阿を切る、とお互ひに住むで居る都同士なら負て居られないが人情の獅噛火鉢、上方は寒いよと云へば、イヤ東京の方が寒うおますと、然し其何れにしても日本の季候で冬は寒いに相違なく、殊に暮の三十日の晩の出立と来ては、旅は憂いもの而を包むラクダの襟巻、存外廉くつて暖かいと途中で買つて巻いたはいが、まがひとあつて毛の脱けること夥しいとは、北八氣が着かず、紺無地の角袖外套に仕込杖の洋傘、當人がお荷物なれば外に持

つてゆく程の荷物はなく、唯懷中に疊んだ手拭だけに昔好みの道中を利かして藍の山道と氣取つて納つたもの。

根がズボラだけに稀々氣を着けて早く來ればべらぼうに早過ぎ、待合室の時計を見れば未だ漸と七時が廻つたばかり。

『チヨツ。』

と舌打をしたが、然し彌次さんもオイソレ者、もしや來て居ないとも限らずと、薄荷の菓子を敷いた様な上を、日和下駄でカタ／＼と音をさせながら、室内を見廻したが見當らず、其れから室外をキヨロキヨロと一廻り、巻蓑を買つて便所へ行つて、待合室へ戻つて人情で再々見廻して而して時計を見ると言つた料が五六回、旅客も

二三度入代つて、茲にもものゝ小一時間、時計を見れば八時五分前と来たが、彌次らしき影も見えず。

『はてな。』

と時計を真正面に見上げる其處の腰掛へドツカリと腰をかけて、入口と時計の針を互ひ違ひに見比べる、時計の一刻々に氣はイラつく、あはれや眼は血走つて来る。

やがて時計は八時を打つた、發車はモウ後廿分、此汽車への乗込み客は、赤帽に荷物を運ばせるやら其れれ待合室を出てゆく様子北八堪らなくなつてカタ／＼と室内を飛出し、驛の表口の車寄せまで出て見たが、来る者は悉皆他人、忙しさうに駈込んで大きな

鞆を突かけながら、

『氣を着けるッ。』

と北八をよろけさせ、睨み返してゆく人やら。

馬場先の廣場から砂を卷いて吹きつける車寄せ、師走の夜るの風を真正面にうけて。

『あの彌次さんはなぜ遅し……。』

と北八ベンをかく刹那、ヂリ／＼と鐘が鳴る。

『えッまゝよ、乗ッちまへ。』

此時北八憤然として、もう四邊へは眼もくれず、急々切符を買つて、押返す改札口へ割込んで、ブラットホームをヤケに駈ながら、

其れでももし亦、先へ乗込んで居ることか？ と未練に列車の窓々を覗いて見たが、出て居るのは悉皆餘所の人の首ばかり。

『フツ莫迦にしゃアがる。』

と口の中でブツ／＼云つて、誰を睨むともなく睨んで立止まると

『貴下も乗になるのですか、お早く願ひます。』

と駈て來た驛員に急立られ、あたふたと其二等室へ飛込むと、直ぐビーンツ。

もう爲様がないひとり旅！

其れでも未だ／＼込むと聞いて居た參宮列車が、樂々と空いて居るだけ有難いと、せめてそこいらで慰めて、ひとり旅の心細さを、

對席の客に言葉をかけ、

『どうもなか／＼お寒うございますな。』

など、北八勢ひ人懐ツこくなる。

『左様。』

と對席の客は、さつさと寢仕度の空氣枕をふくらせながら、さも面倒臭さうに、

『どちらまでおいでとす。』

と紋切型の訊き方。

『へい鳥渡參宮に……。』

『何、伊勢へおいでになるんですか。其れぢや此列車ぢや不可ませ

んよ。』

『えッ。』

と北八キョトンと驚いた眼をして、

『ちちッ、違ひましたか。』

『え、これは明石の方へ行く列車で、伊勢へ行くのは後の方に尾いて居る列車ですよ。』

『へーいそッそいつア厄介ですな。』

『厄介ですども、此列車は龜山で分れて明石へ行くんです。』

『成程。』

『品川へ着いたら後の方へお乗替へになつたら宜いでせう。』

と鬱陶しさに云つて、ふくらむだ空氣枕のネジを廻して、

『イヤ失敬。』

と空いたにまかせて伸々と横になる、北八其客の寢姿に熟つと眼を落して、とんだ面當だが其客が憎らしい様な氣がする。振出しから一々のドヂさ加減、思へば彌次さんが怨めしい、一體全體何うしたとどか、察するに年の暮の掛取萬歳、ごまかし損ねての窮命か、心得澄ました打合はせの案内も水の泡、泡を喰つて汽車へ乗れば、此始末、殊に北八上方へはこれが初旅とて、頼りないこと夥しい。

品川驛へ来て大あはてに、後の方の山田行へ乗うつつて見れば、山田行の二等はたつた一車で、客は鮎詰の大苦るしみ、ヌチームと

人いされでムーツとする真中へ入つたものゝ、肩と肩とを押し合つた兩側の乗客をズートと見渡して北八は情けない顔、伴がなければ物も言へず、唯黙つて萎氣るばかり、兩側の客も流石氣の毒さうに立つて居る北八の顔をデロ／＼と見るが、何れも持參の敷物一杯、其れも何時程遠慮なしの自由が利かず、掛られたのが僥倖と云つた場合、勿論譲る様な氣もなければ、譲る様な席もなし。

行先は百何十里、時間は是より十五時間、時は人間の寝る時分だ寝る所か、掛る所か、立往生は酷からう、北八あわれや泪含むで來た。

尤も北八長旅らしき荷物一ツ持つて居ねば、何れは鳥渡そこらの

旅と乗客も想つたらしく、

『伊勢へお出になるのでなければ、前の方に空いたのがありますぜ。』

と年配の旦那らしい獺の襟のが、悄氣て立つた北八を見上ながら云ふ。

『いえ、私も伊勢まで行くんです。』

と思はす恨めしさうに云つたものだ。

『いやそりや大變だ、何しろ此室は大體伊勢行きらしいから、貴下夜通し立ン棒ですぜ。』

と聊か同情の色をつけて云つたものゝ、云つた所でどうにもなら

ない。

『へい。』

と北八ほろりと落す一雫。

二

其れでも天道ひとり旅を殺さず、横濱驛へ着くとヌーッと起つた
大きな外國人が北八の袖を引き、

『あなた、お掛なシヤイ。』

と親切な捨白を残して、故人高田實と云つた身で大股にツカ／＼
と降りて行つた。思がけない此仕合はせ、北八喜ぶまいことか、泣
ッ面を擦つてペコペコと安ッぽく天窓を下げ、漸つと腰を掛けるに

は掛けたものゝ實の無いのは日本人で、大きな外國人が起つたあと
なら、瘦た北八が樂々と掛られさうなものを、起つが早いから隣り
の人が股をひろげて巾をとり、北八出来立だと細くなるやつ、ツイ
忌々しく、

『チヨツ。』

と舌打をして態ど肩を張る様にすれば、兩隣りは言ひ合はした様
に狭むだ北八を横目に睨むで、兩方から黙々裡に肩をグイ、グイと
来る。

然し其れでも掛られたのが僥倖と、北八觀念の眼を閉じて、堪へ
て居る中には行く所へ行けるだらう、何のことはない臨終の心持

これ臨時う汽車とはドデごんすと、密かに苦るしい洒落が浮んで来たが、伴がなければ咽喉でゴツクリ、洒落が胃袋へむぐり込むなどはムカ／＼する次第なり。

其れでもマア／＼汽車は萬遍なく走つて、先へ進むのがめつけもの、ものは考へ様とあきらめ様、やう／＼鮎詰の乗客も諾上して空氣枕を窓際へ當がつて傾向けに首をのツけ、腕を組むで反つて縦に寝るといふ器用な仕度をするのもあれば、肩と肩を押されて居るのが寧ろ嬉しいと言つた様に、寄添つた若い夫婦が、合財袋からパンを出して、

『貴郎召上がつて。』

『ウム。』

なんかんと喰べながら、

『貴郎もうこゝは何處でせう。』

『未だ國府津へも來ないやうだね。』

『國府津と云へば、ホラいつか箱根へ行つた時はようござんしたわねえ。』

『ウム左様だツたね。』

と型の如く願を撫てニヤリと來た。

『でも儂彼の時分は……未だ儂、貴郎にあんまり口が利けませんでしたわね。』

ど来てこれもニヤリ、察するに其箱根は新婚旅行の時なのでがな
 四ツの膝を一つの膝掛に、這麼想出を言ひ合つては、パンを出して
 はムシヤリ、ムシヤリとニヤリの中の好さ、北八は此真正面に左右
 から小突かれながら掛て居るのだ、勢ひ觀念の眼も見開かざるを得
 なくなつた。

薄眩を開いて見てあれば、つぶつて聞くより氣にならない顔つき
 霜降の外套にお召のニード、男は三十がらみの思の外むつりした
 貉好みのいゝ男で女は廿二三赤い手絡の大丸髻、笑ふと白い齒が惣
 出になる市川左團次によく似た顔、左團次は當時人氣役者だが、然
 し女形には無理な顔立、貉の好男子に左團次に似た細君では、見て

居て口惜しがる程な色つぼさのないので仕合はせと、北八つまらな
 いことに安心して、序ながらに乗合を一わたり見廻せば、天窓禿て
 も止まない浮氣のいゝ年配、古友達の二人連れのが、寝られぬまゝ
 の輕口を合はせて、袂落しのウキスキーで調子がはづみ、

『明日の晩は久し振で古市かね。』

『貢以來の十人斬を見せるかへ。』

『違へねえ、随分斬る方ぢやア、ヒケを取らないからね。』

『時に古市もいゝが、鳥羽まで伸すのも面白からうぜ、大分妙なの
 が居るさうだよ。』

『もてに戀塚かね。』

『ふられる奴を鳥羽ツ尻を喰ふと言ひやすアハハハハハハ。』

『年齢の故か洒落にも骨が折れるぜアハハハハハハ。』

『オイ、年齢の事は言ひツこなしに爲様よ、折角お互ひに山の神から放免されて旅に出たんだ、宿帳へは伴の年齢を附けたい位なものさ。』

『所が女の子が阿父様と言ひます。』

『そりや坊ちゃんとは言ひ憎からうウフッフ、ハハハハ。』

『ウフ、ハハハハ。』

年齢の手前も旅の空ツこと、面白さうに喋舌立てるのを聞くと、若い夫婦の中好しを見せつけられるよりも羨やましく、今更に彌次

さんが怒めしく、癪に障つて乗ツちまつたもの、せまじきものはひとり旅、誰れに物言ふ對手もなく、居たら負ずに洒落飛ばさうもの、折角出かゝる駄洒落名洒落を、其まゝ咽喉へと逆戻しは氣のぬけた藝當、と云つて獨りで物を言つたら眞氣の沙汰とは思ふまい、寢るに寢られず、喋舌るに喋舌られず、マヂリくと乗合の顔並びを唯見るばかり、情けない其眼つきツたらない。

箱根の雑所、大井の川止、やかましいのは新井の番所、吉田通れば二階から招く、尾張名古屋は城でもつ、其の手は桑名の焼蛤、いろんな文句で憶えの通り名、先祖の彌次喜多がトボケて来た道中筋せめて晝なら窓から観やうに、五十三次唯眞暗な夜の汽車、スチ

ームがのぼせたく廻つて、人いされと巻蓑の煙がモーツと籠つて
 頭腦が痛む、何れも悶へ苦るしむ様で、漸次々々と深更に及ぶ。
 連のあるのは喋舌疲れ、連のないのは黙り疲れ、疲れ眠りに腰を
 掛た縦のまゝで、口をあけて佛作つた顔をして居るのもあれば、空
 氣枕をかついで眠たのが、枕と首とが左右に分れて、あかの他人の
 隣客の肩へゴツン／＼と天窗をぶつけるやら、ぶつけられたのが朦
 朧と眼を見開いてふくれるやら、灰落しは吸殻の山、腰掛の下から
 土瓶がころげて、密柑の皮と涕紙、壽司辨當の死骸はそれ／＼足元
 へ撒かしツ放し、總て人にも、物にも遠慮の無さ加減、小汚なさ加
 減。

其れでも北八その中でトロリと程はして、薄ら寒い生欠伸に眼を
 覺まして見ると、窓外はいつか白々と名古屋驛へ着いて居た。

『牛乳ウー。』

『お茶ア。』

と呼賣が駈てゆく白い息、洗面所へゆく寢起の人の履物の音が寒
 く冴へて、せい／＼した様なさびしい様な、驛の倉庫の屋根の霜、
 北八一層ひとり旅のつまらなさといふものが身に沁た。

女は白粉のどころツ剝げ、其れでも乗客の燻ぶつた顔がぞんざい
 ながら洗はれて、それ／＼元氣づいて來た。

街道の松並木を、田圃の霜と綾に眺めて、遠山の雪、冬の陽なが

らほかくと窓の日ざし、龜山驛へ着く頃は最早高く昇つて居た。

「まア〜天氣の好いのが僥倖です。」

「左様さ、降つた所で喧嘩にもなりませんからな。」

伴のないのも一夜馴染に此位ゐの言を云ひ合つて居る、あかくどした車内の日當り、北八の向ふ三軒兩隣の客がへんな顔して北八の風姿をチロ〜と見るので、はてなど北八氣にして自分を見返すと、これはそも如何に、これは如何に。

紺の角袖外套に樺色の毛が一面、仰山に云へば芝居の狐の縫ぐるみ、急に變つた此有様、拂へば其毛が鼻の穴へ。

「ハッ、ハッ、ハックシヨンツ。」



隣の容に涙を撥かけて、

『や、どうも失敬……。』

とヘドモド謝まりながら、起上つてグルリと廻つて、ハテ解らな
いのは此毛だらけ、何程女に罪を造つたとて、狐に化ける筈もなし
などくくだらなく考へて居たが、偶と氣が着いてよく見れば、あゝ
これだ、これだ 襟卷！の毛だ。

屋臺の焼大福を買やアしまし、廉くつて暖かいと途中で買った
錢失ひ、まがひラクダの襟卷、たつた一夜の苦るしみで、ものゝ見
事に脱ちまつて此始末、何てまがいインでせうと洒落が出ても相手
はなし、北八テレで差俯向き、暫時考へ込んで居たが、やがて手帳

を出して、斯様もあらうかと書いたのは、

外套のコンにつく毛のぬけ詣り

化されて買ふとんだ襟卷

三

業平の東下りだつて、ヒョットコの伊勢詣りだつて、故郷を離れ
て百何十里、遠くも來にけるものかなと感じるのは同じこと、何う
あとさきになつたものか、我が思ふ人はありやなしや、もしや彌次
さん一汽車先に來て居て、遅い〜と意地悪るに洒落るのではある
まいかと、山田驛へ着いた北八、プラットホームをキヨロつきなが
ら、改札口を出て亦停車場内を一廻りして見たが、そりや空頼み來

て居さうな筈がなく、それとも遅れて後の汽車かと思ひもするが、と云つて待つて居てポカンを喰つては、長い道中を短かく遊ぶ時間の冗費、暮から春への五六日を、伊勢詣りから京大阪へ飛双六、こりや斯様しては居られぬわいと云つた身で、未練をさつぱりステーションの車を呼び、

『オイ案内を頼むぜ。』

と、東京だと郡玉舎といふ旗の附くやつ、ノロノロ歩くは病人が見物の俵、氣の利いた圖ではないが初旅なれば通も云へず。

神風の伊勢の日向、驛前の廣い通りを俵の上で口を開いて、其ノロノロと走らせてゆく心持は、北八自分ながらポツと出の氣分がす

る。

何々講御宿の古看板、兩側に並ぶ旅籠屋の講中暖簾、名物の商店、賑やかに而してのどかに、遙々と今年の納め詣での人々が打連れてゆく、停車場から真正面に五六町、突當つて右へ斜めに、塵も止めぬ飾砂利の廣場、下馬の制札、白木の橋の袂へ俵は着く。

こゝが外宮様と案内の言葉も自然折屈んでぞんざい者の北八も、何がなしに有難い心地。

外宮は、豊受宮亦稱して渡會宮とあり百穀實りの司神、唯有難く拜殿の砂利に坐して、兩手を脳天から揉下して居る、前なる道者とする通り、北八も其通りに真似をして、其れより末社の數々を禮拜

し、やがて戻つて白木の橋の手前まで来た時、何とも云へぬ心のがくしさに、先づこゝで一吸と、巻蕨を咬へた刹那。

『オイッ、蕨喫んぢや不可ん。』

と後方からお巡査さんに似た制服のお役人が、ガツとばかりに叱りつけ、睨み返して行き過ぎる。

『へッ。』

と北八吃驚して、咬へた巻蕨を愴慌て棄れば、

『旦那、こゝへ棄ると又やかましふ言はれます。』

と案内の車夫は、お役人を見送りながら巻蕨を拾つて差出せば、北八ドヂを喰つて忌々しさうに、



『チヨツ江戸ツ子でえ、棄た卷葺が喫めるけへ。』

『へい左様なら私がよばれどきます。』

と車夫は卷葺を耳へ挟むで、やがて橋の外へ出ると、

『旦那こゝなら喫んでも大事ありまへん。』

と耳の卷葺を取つてマチを擦り、旨さうにスバリく。

北八ひとり旅のひがみで莫迦にされて居る様な氣がして堪らず。

『チヨツ、さつさとやつてくんな、日が短けいからな。』

と其所に置いてある俥に乗れば、

『旦那、こつちやのが俺の俥ですが。』

阿呆らしさうに、笑はれる、焦りくしながら乗替へて、

『フン伊勢の俥はみんな同じだから判ら無へや、東京なんざア悉皆
蒔繪で種んな模様になつて居るんだ。』

と北八ヨタな啖呵を切れば、

『へい、ありや旦那、支那へ行きますのやが……。』

と亦やられる。

外宮を出て、先來た停車場前の通りを横に裏へ出てゆく細小路、
それが古い山田の町並、總じて家々の軒低く、商店の看板は昔のま
ゝ、壁の色氣のつよいのが江戸で見られぬ感じを出して、今日大晦
日を忙がしさうな人も見かけず、狭い相對いの店番が眠たい様な顔
つきして、偶々通る俥の人を茫乎見送る穩かさ、實に神様のお膝元

なり。

『こう車夫衆、此土地の家の建方は何だかペラボウに棟が低い様だね。』

と言へば、車夫は振返つて、

『こりやなア旦那、外宮様内宮様が平家ですよつて昔時から御遠慮申して皆這麼建てますのや。』

と答へたもの。

『成程。』

と北八擽つたく感じ入つて、

『だが、何だな神社佛閣の二階屋ッてのは外にもなかつたぜ。』

と揚足を取れば、

『京の金閣寺は三階やて。』

と来る、案内の車夫を爲様事なしの言葉敵、あかしくもなく行く程に、道は爪先上りに家並がどこどなく色めいて、塗格子の表窓、柿の簾暖の出入りから白粉の香が漏れる。

『旦那こゝが古市の花街ですが。』

『フーム成程、此登りが相の山ッてんだな、昔時ア随分通つたもんだが、すつかりと見忘れちやツたい。』

『は、旦那御存じかな。』

『御存じも御存じでないも、古市ぢやア通り者だツたのさ。何ね遊』

ぶ氣も無かつたんだがね、思へば女の子にも苦勞をさせたもの
 だ。」

「アハハ、油屋のおこんさんかいな。」

「オヤおめえ知つてるのか。」

「アハハ、東京のお客さんをこゝへ案内すると、どなたも其麼言を
 よう仰有るでなアハハハハ。」

「ウフ、左様かい洒落が少々古市と來たかいウフハハ。」

派手な遊びは備前杉本の大間口、廣い板の間の黒光り、大時代の
 衝立を正面に、當世の氣がどこにも見えぬ有難さ、次いで名代の油
 屋は旅籠屋と變つたが、それも昔時の面影を偲ばせて、伊勢泊りな

ら此邊り、北八聊かムラ／＼とはするが、ものゝ不思議は江戸ッ子
 といふ代物、鼻シ張は強いが思の外に意久地はなく、ごうもひと
 では弾みがつかず、唯斯様した事に觸れる時、怨めしいのは彼の彌
 次さん、癪にも障るが戀しくもなり、こゝらでヒヨッコリ逢ひの山
 と來りや有難山、泊つて明日の朝熊山と、やまいづいた未練な洒落
 を嚙ころして、残念ながら通り越す、萬金丹屋の前から次第に街の
 色氣はぬけて家並が途切ると右手は野遠見に山の書割。

「旦那彼方に見えるのは朝熊山、こつちやが恰度内宮様の背後の神
 路山ですが。」

と指さしながら振返る。

『ウムこゝいらだね、阿波の大盡がおこんとお岸を伴ふて朝熊山の朝景色の成金遊びをした所は。』

と北八淨瑠璃から引張出してわからない通を言へば。

『はゝア。』

と車夫は判じ兼てへんな顔。

四

と北八氣が着いて見ると、其山々を見渡した野遠見を前にして、左り側に燻ぶつた太い棟木の廣い間口、土間の踏込に埃り臭い床几を幾つか置いて、見るからに大時代の古看板、お休所太閣餅と由来ありげの腰掛茶屋。

『オヤ何だい車夫衆、此太閣餅ツてえなア。』

『こりや此所の名物でな、その昔時太閣様がこゝで餅を喰べたとあります。』

『そいつア妙だ、オイー盆喰つて行かう。』

と實は北八、昨夜東京を立つてから、ひとりになつたモシヤクシヤやら、汽車の込合に物喰ふ程に落着かず、辛ふじて辨當一本喰べたものゝどこへどう入つたのやら、眠いと苦しいと疝癪ど、襟卷の毛の脱けたテレ臭で、腹加減さへわからず、山田へ着くと直ぐに俵の見物巡り、伊勢の神風にノンビリと吹かれて、漸く茲にオヤ腹が空いて居ると氣が着いた始末。

名物に旨い物なしともいふが、亦空腹にまづい物なしとも言へば
まんざら喰へないこともなからう、昔時太閤様の御用とあれば、あ
やかつて出世の縁喜、やがて歸つて熈天下を平げやうとは考へたも
の。

『オイ車夫衆にもやつてくんな。』

と氣前を見せて、ぬるい番茶の缺土瓶、剣た塗盆に何とも得しれ
ぬ薄べつたい餅五ツ六ツ、摘んで一ツやつて見たが、北八どうにも
旨くない顔、折角ながら喰殘して、

『フームン太閤様はこいつが好きだつたのかい。』

と亭主に云へば、鯉口のどんつく絆纏、前垂の粉を拂ひながら、

『お好きか何うやわからんが、彼方の額に其由來が書いたりします。』
右手の壁の上を指差すのを見れば、成程仔細らしい古額に、此餅
の故事來歴ものくしくも記るされたり、其要領を摘んで云へば、
其昔、太閤殿下が未だ藤吉郎の時勢、信長公の代參とあつて、年々
伊勢へ參宮の途次、必らず此舖へ憩はれて、此餅に舌鼓みを打ちな
かく旨いと云つたげな、猶まことしやかに書き添へて、其時分は
此餅、月形なりし由なご、由來は略と斯の通り、今をさる冠者三
百何年の昔時を茲に想出の太閤餅。

時に北八つらく思ふらく、これを喰つて旨いと云つた太閤様の
如才なさ、其口前の輕が故に、後の世に、如才なき男をさしてたい

こもちとは傳へけりと。

あゝ彌次さんが居たら此名解釋を聞かせるものを、とツイ思ふのも旅心。

『あい大さにお邪魔、今度藤吉が來たら宜しく云つておくれ、江戸から徳川の康ちゃんが來たと云つてね。』

など、北八眞顔でヨタを云ひながら俵に乗れば、亭主洒落がわからず。

『はアどない仰有ります。』

と訊かれては挨拶に困る。

『チヨツ心細いなア。』



と呟やけば、

『左様、おひとり旅はなア。』

と来た、北八莫迦々々しくなつて、

『オイ、車夫衆早くやつてくんな。』

と洒落が討手を喰つて逃げ出す型、又ひどい目に遇ひの山を漸く過ぎて、やがて車は内宮へ着く。

内宮、これぞ此國の神の始め、天照皇太神の宮居、言ひ知らぬ尊さに北八のトボケ心も亦改まつてポーツとなる、宇治橋の欄に望む五十鈴の清流、上にめぐりて川を其儘の手洗、梢空に高さ老杉行儀おごそかに左右につゞき、樹影深くしんめりどして、宮居近くゆく

程に心神自から清浄、彌次さん怨めしさも、汽車の御難も、何も彼も、思ひの總ては消えて浮かばず、たゞビョコ〜と天窗を下げる北八といふ善人の影が、拜殿の砂利にうづくまるばかり。

やがて内宮の禮拜終へて神苑を出れば、俵をあづけた角のお土産店、否應なしに迎へられて、神路山の杉細工、名物さまざまあれは如何、これは如何。

『まアお掛あそばして。』

と番頭が云へば、背後から女の子が、

『お茶一ツ。』

と買はずには置かず、是非もなく手荷物を殖やして、北八再び

俣へ乗れば、車夫は梶棒をあげながら振返つて、

「旦那、参宮の御案内はこれで終りましたが、これからごないなさります。」

と訊かれて、

「左様さ……。」

と北八腕を組むで一才當惑、何れにしても伊勢詣りはのつけの當と、まゝの皮ひとりまで済ましたのだが、これからどんな工合に飛んだものか、心得済ました彌次さんにすつぽかされて見當がつかず、やたら車夫に手放されては、大きな迷兒の見つともなし、

「二見は御覽なりませんか。」

と車夫に言はれて、

「ウム其事さ。」

と危く納まつて旅馴た言ひ方、時計を見れば未だ三時にはならず、

「オ、未だ早いや、何うだらう車夫衆、これから二見へ廻つて今日の中に奈良へ行けるかね。」

と心得た顔で内々さぐつたもの、

「大事ありません、チョツと急いだら行かれます、そやッたら二見行の電車の所まで御案内しましよ。」

「ウム左様してくんな。」

神宮學院と農業館の間の新道、切割つて美事に築いた小松山を左
右に、午後の陽をぬつくり浴びてうとうとしながら、やがて着いた
は二見行の電車の支線、小川の縁の停留所で俥を降り、
『そんなら車夫衆、随分壯健でかせぎねえ、東京へ来たたらチト寄ん
な。』

と冗談な世辭を云つて案内賃を拂ひ、折よく来た電車に乗れば、
昨夜汽車で乗合はした若い夫婦に再たバツタリ、が、ごつちもごつ
ちで言葉もかけず袖摺合ふも知らん顔で、唯若い夫婦は昨夜の通り
睦まじい所を見せつけるばかり。

五

昨夜乗合の、通らしいのが語るには、鳥羽で陽氣な越年をして、
而して二見の初日の出、それから參宮が此度の順だとあつたが、來
て聞けば何の事、二見の日の出は、冬は冬でもない山の蔭で、夫
婦岩の真ん中から五光がさすなどは繪空事、殊に海岸を山の鼻へ突
當りの、行詰つた浪打際から左りへ逆に見る岩の眺め、北八お祭禮
の盆景で見て想像したほどの景色ではなかつたり。

根が無風流の北八、歌に美化して詠じるより、ヨタに茶化して見
て了ひ、二見驛へさつさと戻る。

人間の腹の仕懸は不思議なもので、北八昨夜から辨當一本と先刻
の太閤餅一ツべらだけだつたが、兎角に悄氣かゝるひとり旅を強が

つた氣にならうにかまけて、空腹を通りして忘れた型、然し流石に
 そろ／＼西へ廻る日影を見ると、氣張りが草疲れ、一層旅情が身に
 沁て、腹の堪へがゲツソリと抜け、我が脚ながら厭にふらつく。
 驛前の茶屋へ其ふら／＼と入つて、

『何でもいゝから喰はしてくんな、な、なにが出来るンだい。』
 と云へば、

『は、でけますものは、おさしみスキ焼親子井……。』
 と丸ボチャの新造が柔かな節廻し。

『スキ焼で飯と頼むぜ早いとこでな、時に姐さん奈良の方へ行く汽
 車は直さ出るかい。』

『は、奈良へおいさやすなら、もう一寸したら参ります。』

『そいつア有難い、ぢや其つもりで飯を早くして……で何かい其汽
 車は何處まで行くンだい。』

『大阪の湊町へ行きまんぬやが、奈良やしたら乗替はあらしめへ
 ん。』

『ほ左様か、乗替はあらしめへんか。』

と腹の空いてる癖に口眞似をして、

『ついでに切符も買ふて来ておくれやす。』

『オホ、。』

と混返されても、やんわりと愛嬌よく受けて笑ひながら、やがて

スキ鍋の焜爐やら膳を運んで、

『えらいお待遠さん。』

『オット来た、そこで切符と飯を早いとこく。』

こゝでは北八、スキ焼のジューといふやつが頬邊へ撥たばかりで別段の失敗もなく腹をこしらへ、待つ程もなく来た湊町行の汽車に乗込み、大晦とはどこの國の曆やら、静まり返つた二見驛の夕べを
出る。

此汽車は昨夜に引かへて殆どガラ明き、乗客は離れぐに二夕組ばかり、さて亦これでは淋しく寒いと人は吾儘。

六けん、高茶屋、あこぎ邊りで全く暮て、龜山へ着くと、東から

来た乗替の客が二夕組三組、中に一人商人の手代らしい烏打帽子の若い男が、北八と隣合はせに、

『御免やす。』

と愛想よく腰を下して、ホツとした様に外套のボタンを脱しながら、

『あゝえらいく、あつちやの汽車ちうたら、まアく、ぎやうなんな人ですが……。』

『はてね、どちらからお出です。』

と、黙つても居られず北八が訊けば、

『私名古屋からですが、伊勢直通ちうのへ乗つたさかい、ごだいモ』

ウ立ち通しだんね。」

「左様ですかそりや大變でしたらう、私も昨夜はそいつへ乗つて大苦るしみて伊勢へ行つたんですがね。」

「は、左様か、そら貴方もえらいこつてしたやろ、ほして元旦にお伊勢さんお詣りせんと今日濟ましてズツと上方へ行きやはりまんねほら洒落てる。」

「今夜奈良へ泊らうと思ひましてね。」

「は、左様か、奈良は宜しおまつせ、私ごだい大阪だすがな、奈良へは常終行きまんね、三笠山なアそらほんまに美しい山だつせ、京の東山は亦別やけど三笠山は一寸ないな……貴方初めてお出やすか

は左様か、そやけど何やなア、今は奈良も京都も寒い……大阪は暖かいけどな。」

と自分の土地だけ一寸自慢をして。

「まア何だすなア、旅は春がようおまんな、ま一遍三野へ行つて見なはれ、そらえらいく、櫻のぎやうさんあること、一目千本ちうたらほらッオウツとまア花の煙りやな。」

此男の喋舌ること、いつもは呆されさせる流石の北八が呆され返つて唯マデリくど顔を見て居る。

「そやけど何やな、今は何處へ行たかて寒いく風がッオウと吹いて、ごだい堪まらんわ、だが何だツせ、マア大阪の繁昌は亦えら

いもんやし、道頓堀千日前なア、どこへゆくかて電車がヴオウーツと走りよる、一寸電車は東京にも負んな。」

と頻りと其ヴオウーツを連發する、櫻がヴオウーツ、風がヴオウーツ、電車がヴオウーツ、北八ヘンテゴに可笑くて黙つて居られなくなり、

『は、あヴオウーツですか。』
と感心した様に混ッ返す。

六

ヴオウー君でも旅は道伴れ、お蔭様で欠伸が出ず奈良の旅籠は猿澤の魚佐がよしなど教へられて、不知案内には頼りよく、やがて汽

車が奈良へ着くと、ヴオウー君窓から北八を見送つて、

『御機嫌さん。』

と聲をかける、振返りくゆくも人情、北八妙にヴオウー君の喋舌調子が残り惜しく、改札口を出て亦振返へれば、未だ窓から首を出したまゝ、

『さいなら。』

今度は汽車の機關車がヴオウーツ。

北八例の如く驛の俵を呼んで、

『猿澤の魚佐へ着けな。』

と道中馴た調子を出し、奈良の都の三條通りを心得顔に走らせて

爪先上りに行手の左り側、ごたくと人の山して魚賣の大道店が盤
臺を並らへ、

『さア、早く早ふ買ふてんか、魚買ふてんか。』

と向ふ鉢巻のが呼んで居る、奈良では其れでも威勢よく聞こへ様
が、江戸ツ子の耳には早ふ買ふてんかは生ぬるく、魚のイキを想は
せる。

『何だい車夫衆、這麼に遅く魚の市が立つのか。』

『へッこりや、毎年つごもりの夜さりだけ立ちますので。』

『フーム、妙な例だね。』

『皆今晚元日の祝魚を買ふとさますので。』

『成程。』

いつか魚市の前を通り越して、右へ稍俵が下ると夜目にも大きな
池の畔、闇に浮繪の水の色。

『久しく来ないが、相變らず猿澤の池は大きなものだね。』

など、北八、間違ひの無さうな知つた振りを云つて反つたも
の。

めづらしい夜更の魚市で、それが大晦の氣分かと思はせはするが
さりどて今来た三條通りもおつとりとした軒並、殊に猿澤の池の畔
りの物静か、宿の魚佐も大戸卸して、僅かに潜り障子の寂しい灯り
が遅い旅客を待つて居るのみ。

先づは北八魚佐の奥二階に上旅籠の客となつて、一本頼んだ膳の
来る間。

『姐さん風呂へ入れるかい。』

『どうぞお入りやして。』

北八意氣がつた懐中の手拭、藍の山道をボンとおろして一ツ風呂
やがて上つてツンツルテンの丹前も旅の氣分、兎も角も旅籠の湯上
りは何とも云へぬ心地と座敷へ戻つて、鐵瓶の松風、茶を注いで居
る所へ、

『もうお上りやして、お早いこと。』

と入つて来た女中が、北八の顔を見た刹那、思はず、



「キヤツ。」

ど魂消る聲、フイを喰つて北八は亦驚くまいことか、

「あ、吃驚した、なツなツ何だい。」

と云へば、

「あ、あ、あふくくく。」

ど女中は震へながら北八の顔を指さして、物が言へず、

「厭だぜ姐さん俺の顔が何かに見えるのかい、ちよ、ちよ、戯談ぢやアないぜ。」

と起上つて、

違ひ棚の上の鏡臺の覆切を脱つて覗けば、あらず思

議や其顔は、物凄くも青隈取つた物怪の形相、折柄撞き出す奈良の

寺院の百八煩惱、猿澤の池に響いてポーンく。

北八自分ながらゾツとして鏡を見詰て考へて居たが、漸つと何か

氣が着いて、

「ウフ、ハ、ハ。」

ど噴笑せば、女中はペタンコに坐つたまゝ猶震へ、

「あふくくく。」

「オイくく姐さん安心しな、化物の正體は解つた、これだよく。」

どブラ下げて見せる濡手拭、おろし立の藍の山道染が悪いので藍

が流れ、洗つたつもり顔が染まつてとんだ山中平九郎。

「もう一度風呂へ入れてくんな。」

女中は漸つと落着いて、

『ヒヤソ』

* * * * *

是より北八元旦の春日詣で、鹿に取巻かれてベソをかく莫迦さか
げんから、大阪のまごつき、寶塚温泉の芋洗ひ、京見物の滑稽等
ヨタを飛ばせば限りなければ、其れは一息して後篇と改め、再び
北八を呼出すこととする。

北八ひとり旅

後編

奈良から大阪へ

この作者御最負とあつて、『北八ひとり旅』殊の外なる御評判、
さりながら猿澤の泊りで左様奈良は、佛作つて何とやら、魂しひ
ぬけてトボくと浪花の脚の踏残し、草疲がぬけたらさアさ歩は
つしと、御催促のとんだ矢文を發止とらけて、ひよツびき兵と瓢
輕^{きん}脊負^{しよ}つた鞆^{うづは}の矢をつがへ、へそ茶栗毛の手綱^{たづな}を片手に、コ
ケオドンの鎧^{よろひ}、兜^{かぶと}は春日の鹿の前立、骨を折つた細工のお土産、
またしてもあくびの籠を開けるとある。

さても北八むかし道中の思つきで、氣取つて持つて來た藍の山道の
 手拭、昨夜の風呂の使ひ卸しに、藍が流れて顔が染まり、眞蒼な
 隈取で宿の女中を震へさせ、見現はしの正體我ながら莫迦々々しく
 再び風呂に東男をゆすぎ上げて、

『何と姐さん、これなら満更捨た男でもあるめな。』

と一寸鏡臺を覗いて膳の方へ向き直れば、

『ほんまにな、ひがしの方はスソキリとしてはります。』

とお客様だから逆らはず、然しお酌をしながら、

『オホ、。』

と笑ふ眼附には、あんまり好い男とも見へない如なり。

『へッひがしも蒸菓子もあつたものぢやねへが、それでも江戸で唐
 琴屋の養子と云やア少しやア知られたものさ、養子と云やア此頃こ
 の奈良の宿屋へ女の子を連れて泊つた大阪の龜屋の養子ツてのを知
 つてるかい。』

と眞顔でヨタを言ひ出せば、

『は。』

と女中は解らず、

『龜屋はんちうど。』

『知らないかい姐さん、彼の男も不了簡な男でね、遊びで張合つて

人の金を遣ひ込んだ揚句が、女を連れて駈落なんぞしやアがつてさこゝらを泊つて歩いたッてぢやねへか、今だに東京まで評判になつて居るよ。」

「は、ゑらい極道やな。」

「其癖嫌に客ツたれでね故郷の大和へ着くまでに銭が遣ひ切れず二歩残して置いたなんざア情ねへ。」

「は。」

とまだ解らず、

「まア貴客、えらい細こいことまで知つてはりますな。」

「知らなくツてさ、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明し、

廿日餘りに四十兩、遣ひ果して二歩残るとねアハハハハ。」

「まア何や貴客、ほんまの事や思ふたらオホハハハ。」

「こりや戀飛脚の新口ではなうて酔ひお客のムダ口といふ俄さアハハハ。」

北八ひとり旅の爲様ことなしに飲けない口に盃を重ねて調子づき手數のかゝる大阪俄の口合、是非なく女中相手に捏返したり。

遅く着いた奈良の宿、大晦とある其夜ながら、佛の在所の静かさ加減、相手の女中は次第々々に眠さうな顔。

「奈良は大晦でも寝るのかい。」

「は、もうそら此地は平常と變つた事あらしめへん……大阪へ行く

電車は夜徹しやいふてましたが。』

『フム結構な國だね、それぢやお膳をひいて、此方も床の中へ片附けて貰はふかね、時に明朝は早立ちとして、此地を見物して直ぐ大阪へ伸すんだから、案内の俵を頼んで置いて呉れ、よしかへ。』

『は、えらいお急ぎなこと、大阪へ行たら誰れぞ待つてはりまんのやなオホ、。』

『違へねえ梅川は忠兵衛が伴れて逃げちやツたしと。』

『小春はんは治兵衛はんと心中しやはつたしなア。』

『ウフ、姐さん言つたね。』

山の寺院の百八煩惱、年の鐘も先刻につき終つて、北八の頓狂な

冗談が黙ると、寂閑、凍て大路をゆく寒さらな下駄の音が偶々に一人二人。

『其れでもまだ人が通るね。』

『つごもりだすよつてなア。』

男衆が夜具を擔ぎ込んで、欠伸をしながら廊下を行つた、やがて敷かれてた床の中へ北八むぐつたが、

『オヤ、く、姐さん掛るのも蒲團ばかりか。』

と、五布を二枚重ねた掛蒲團、両手でパツパツと芻ながら、

『こいつア寒いや、え、抱卷着はないのかい。』

『は、こつちやは悉皆其れだす。大阪へ行たかて、京都へ行たかて

……ひがしのお客様はよう言やはりますけどな、其れが風だすよつて。」

『やれ／＼左様かい、袖ないこつた。』

『オホ、まア御悠りお寝み。』

と女中は、遅いお客を漸つと寝かしてホツとしたといふ身で引下る、と最早北八は大顛。

二

大佛の鼻の穴から明の春、北八夢に彌次さんに遇つて、喧嘩をふつけて居る所で目が覺ると、最早廊下の戸は明いて居る、くるりと腹這になつて首を擡げて隣寸で一吸。

『奈良で元日するが感心。』

と寝起きから這麼洒落て見たがひとり旅のやつぱりさびしく、掛蒲團の着馴れないので肩が寒い。

敷島を二三本、唯まぢ／＼と吹かしちまつて、冷えぼつたくなつて手を引込めると、また寝返りをしてむぐつたが、流石にもう眠ひれもせず、考へる程の要心もないが、てんで知らない上方三界、大阪京都は繁華とあるだけ、ひとり歩きは心細く、これから大阪へ行くとして、ハテ誰れぞ訪ねる奴はないか、と考へる。

『ウームこうつと、住友鴻池は叔父さんではなしと……待ちなよ、オットあるある、デブ君の長兵衛彼奴ア大阪に居る筈だ、久しく會

はないが、訪ねたら嬉しがらう、たしか曾根崎に居るとか聞いたが、彼の柄を云つて探したらわからない事はあるまい、何しろ稀らしいデブ君だからなあ、その事く彼奴なら一寸洒落も解るよ。』
と這麼氣が着くと、北八ひとり旅に張合が出て、のこくと起上り、手を叩きながら廊下へ出て、

『オイく姐さん顔を洗ふのは何方だい。』

『ほ、もうお目覺やして。』

と二階へ昇りかけた昨夜の女中は、

『どうぞ此方へ。』

と降りてゆく、後からツルツルテンの紡績の丹前、手拭を肩に塞

さうな格好。

『ハツハツクシヨツ。』

北八噓と一緒に涕を飛ばして、丹前の袖で横撫でをしながら洗面所へと降りる。

廊下も柱も時代に光つて、奈良で代々の大きな宿屋、店口の土間から續いて中庭、廣々と廊下をまはした中程に、湯桶を置いた上流臺、楊枝を使ひながら湯桶の蓋を明ると、寒い土地の、冷たい朝になつかしい湯の煙り、庭越の彼方の座敷へ、うやくしく銚子盃元朝の祝儀の膳を運ぶ女中の庭下駄の音が、オットリとした四邊へ響く、ガバくくと口を濯いでチャブくと顔を洗つて居るぞんざい

者の北八にも、旅の元日といふ心持が何とも云へず身に沁る。

二階へ戻つて梅干でお茶、ところへ今見た御祝儀の銚子盃が廻つて来て、

『年始させて頂きます。』

と女中が大改まりで手を仕へる。

『イヨウお目出度ウ、ねえ姐さん昨夜着て今朝だが、大晦から元日と来ちアつまり二年越のお馴染だね。』

『ほんまにな、生れたお子達なら昨夜と今朝で二才になつてはりますなアホ、。』

『ウム違えねへ、だが何だな子供だと生れて直ぐ二ツ年齢を取るン

だが、大人だと一ツしか年齢を取らないのはハテ何うした勘定だらう。』

と北八、それからそれとよくつまらない言が云へたもので、喋舌りながら盃を納めると、雑煮の椀の蓋を取つて、餅をすくひ上げ、

『オヤ奈良の餅は丸インだね、アハ、こいつを崩して喰ふのを奈良丸崩といふんだらう。』

『まあオホ、。』

『それからこつちのお椀は。』
と別の椀の蓋を明けて、

「フームこりや、蛤はまぐりの吸物すひものだね、これも目出度めでたい御祝儀ごしゅうぎと来た、浪花なみの旅たびに奈良ならで蛤はまぐりとは何なにうだい。」

「オホ、ようまあそないに軽口かるぐちが出でやはりますえなア。」

「アハ、これが商賣しょうばいで道中だうちゆうをするんだ、それをね商賣仲間しょうばいなかまの彌次やじさんといふのに東京とうきやうを立つ時ときからはぐれて居ゐるので、一昨日おとひから洒落しゃれが内肛ないこうして居ゐたんだから堪たまらないや、對手あひてさへありやアどこでも破は裂れするのさ。」

「オホ、おもろい言ことば云いやはりまんな。」

「時に昨夜ゆふべ頼たのんで置おいた案内あんないの車夫くるまやは來きて居ゐるか。」

「は、もう先刻さつきに見みえとります。」

「何なんだい待まつて居ゐるのか、そいつア氣きの毒どくだ喋舌しゃべつちやア居ゐられな
い、さつさと喰くつてお立たちとしやう、亦また洒落しゃれの出でてこないうちに勘定かんぢやう
々々かんぢやう」

仕着しきせと見みへて襟えりに宿やきの名なを書かいた被衣ほつび、紺臭こんぐまいのも春はるの氣分きぶん、
案内あんないの車夫くるまやはゆツくらゆツくらとひき出だして、所々ところどころで梶棒かぢぼうを搦つかみ直な
して向むき返かへり、立止たちとまつて紋切形もんきりがたの案内あんない節ぶし、事難ことむづかしくも説明せつめいに取とり
かるを、北八きたはち俵つらの上うへで大儀たいぎさうに聽きいて居ゐる、膝ひざに小荷物こにもの蝙蝠傘かぶつがさ、
御見物ごけんぶつの顔かほつきは、北八きたはち自分じぶんながらごうも氣きが利きいたものぢやない
どなり。

元旦げんたんの春日詣かすがまうで、土地ごちの人々ひとびと京大阪きやうおほさかの客きやくもあらう、三々伍々さんくごご打連うちつ

れてゆく、其人々の物好きが、振返つて、立止まつて、車夫の説明
と北八の顔をめづらしさうにしけじけと見比べる。

北八氣が利かないのを通り越して辛くなり。

『オイ／＼車夫衆、説明はもういゝぜ、一通り唯見て歩きやい、
ンだよ、嫌に人が面を見やアがる。』

『左様ですか……旦那はん方はもう何でも御存じだツしやろな。』

『ウムめつたにも來ないがね。』

と心得た顔をして、

『名所の傳説由來よりは、馴染の鹿に煎餅でもやらうぜ。』

と煎餅を買はせて投げてやれば燈籠の蔭、道の端、木の間をノソ

ついて居る鹿が、角づき合の我勝に俵の周囲を取巻いて、おくれよ
／＼とせがむ如な顔つき。

『オイ／＼鹿諸君、もうこれツきりだよ。』

と残つた一二枚を投げてやつたまではいゝが、其れを喰ひ損なつ
たドジな鹿が、蹴込みの端へ出して居た足の先を、ノソソリ寄つて
鼻の頭で擦すつたので、北八噛れたと間違へ。

『ひやアつ。』

とばかり變な聲を出し、蹴込みで足をバタ／＼やらかすあわてさ
加減、鹿はビツクリして早歩に逃げ出したが、參詣人は忽ち寄つて
俵の周囲へグルリと見物。



「何や〜。」

「鹿があのぼりさんの足喰つたんや。」

「阿呆な鹿やな。」

「阿呆かて畜生やないか。」

「なんぼ畜生やかて足喰ふたら碌なことありやへんぜ。」

「そらまた何んでえな。」

「あし喰ふたむくいちうてなアハ、ハ。」

「何吐すぞいアハ、ハ。」

なか〜上方にもヨタが居る、と北八いよく〜テ返へツて居る
 其耳へ、ワイ〜喋舌る其見物の洒落が入り、心密に感心しながら。

「やい／＼何が面白くツて見てるンでえ。」
と啖阿を切り。

「車夫衆早く駈て」

と汗を拭く。

年は新玉のけふから春だが、鹿の歩くも薄ら寒い冬時雨、今にもお降りのありさうな雲ゆき。

「べらぼうに寒いぜ雪にでもなりやアしないかね。」

「さ、何とも知れまへんな。」

「降られちやア助からねへ、さつさと参詣して一順見物したら大阪へ行く電車の所まで持つてツてくんな、何しろ莫迦寒だ。」

「奈良は寒い所ですが、こゝへお出やすなら春だすな、春はよろしおまんね、若草山へ登つて見なはれ、そら何とも云へまへんな。」

喋舌りながらノロ／＼と走つてゆく、千年の昔時を語る松杉の梢、燈籠の數取、社参道の並木を、やがて石段の前で梶棒おろして。

「旦那様こゝからお歩きやして。」

「オットきた。」

土佐畫で描く山を脊に丹塗の色がコツテリと目に冴へる、本社、若宮、北八宜しく人真似の柏手に何を祈るのか、實は自分にも解り兼ねる文句をムニヤ／＼と眼を閉ぢてやつて居ると、巫子が舞始める拜殿の神樂の音と、敷石に賑やかな参詣人の下駄の音とが、好い心

地に耳に入る。

北八神妙に禮拜終り、やがて戻つて俵に乗れば、正面の社參道を小半丁、右へ草の小路へ入つて、成程春はさぞかしと思はせる三笠山の裾へと出る、奈良人形角細工お土産の軒並び車夫は一議に及ばず其とつたきの店先へ着けやうとするのを。

「オットット車夫衆、着けずに駈つてくんな。」

「へ、左様か。」

と車夫は澁い顔をして、北八を一寸振返る。

「角細工は家の山の神の澤山だよ。」

「へ、左様か。」

スゴくとも亦駈出したが、其軒並びの四五軒目、古めかしい店附きに薄汚れた幕を張つて、恐い顔のおちさんが控へてオビヤカシた刀掛臺、車夫はそこで亦立止る。

「これが名代の三條小鍛冶宗近の舗……寄つて御覽なりますか。」

「叱られさうで氣味が悪い、さつさと駈つて。」

「へ、左様か。」

元來北八無趣味のヨタ者、歴史を知らう筈もなく、眼は節穴、働くのは口ばかり、而して其喋舌る割合に臆病、おまけに嫌に見得坊と来て、どこへでも入れれば妙に氣前が見せなくなるやつ、其癖あとで悔むといふ厄介者、そこで自ら其れを知れば、臆病と面倒臭いの

と經濟とを考へて。

『やつさと駈つて。』
の一點張。

二月堂、三月堂の廻廊からダラ／＼下りの道を曲つて、一錢で一ツ撞かせる名代の大鐘。

『旦那さんお土産に一ツお撞きになりまへんか。』

『へッ撞いた響きを持つてけやアしまいし、駈つて。』

『へ、左様か。』

『だが車夫衆、一錢で一ツ撞かせちやア年分にやア随分儲かるだらうな。』

『そりやえらいこつたす。』

『大鐘儲けツてなこれだね。』

『へ、へ。』

と車夫は面白くもなささうな笑ひ方。

『鐘を鳴らして儲けるンだから、鐘なり金ともいふかね。』

『へ、へ。』

やがて大佛殿の門前へ着く。

四

89
ひかし／＼大佛様手入の時、利口な職人が眼から鼻へぬけたとある、落し噺が嘘にはならない、お顔の長さが一丈と六寸、幅が九尺

五寸と聞く、長屋住居の間口程、坐つた高さが五丈三尺五寸とある
 もしも此大佛様がノツツリ立上がつたらどんなもの、歩き出して、
 物を言つたららごんな聲、物を喰つたららごんなに喰ふか。

仰向いて高々と見上げながら、北八相應に這麼ヨタを考へて。

『ウーム成程大きなものだなア。』

と暫くは唸つたり。

偶像といふはむちや、一心一仰天下國家一家一門の泰平無事を願
 ひ寄る、人の心の信念が、造り上げたとして見れば、唯大きいと唸
 つて居る北八にも、自然言ひ知れぬものが身に泌みて、へらず口の
 俗念がいつか去り、不思議な程北八茫乎して、自分ながら殊勝な型、

門の出口の番人の店で、記念の爲に買つて行かうと、大佛様の墨
 刷の畫の直を訊けば。

『はいこれは一枚二圓……。』

と、折角殊勝な北八の顔を、高いから買ふまいと云つた眼付きで
 番人の爺さん無愛相にヂロ〜と見る。

『え、これが二圓ッ。』

と思はず出した手を引込めて、値の高いのと爺さんの面つきが癩
 に障り。

『へッまた今度來らア。』

と捨言葉、門前へ出ると。

「車夫衆駈つて。」

と心持は元へと戻り。

「大佛様も嫌な爺いを飼つて置くぜ。」

と車の上でブツくさる。

南都炎上の往時を語る伽藍の舊跡、文珠堂、五重塔、名木の花の松蔭、車の上に見流して、鼠色の低い土塀の小路へ出ると、程もなく大阪行の電車停留場へと着いた。

「左様ならこゝから乗やしたら大阪の上本町へ着まね。」

「よし心得た。」

と、兎角北入心得た顔をして多くは訊かず、案内賃に草鞋錢そこ

は少々氣前を見せて車を降りると切符賣場へ駈附ける。

奈良の舊都の静かさも、電車の便の忙しさは、人の氣を短かくして、左程でもない込合を、田舎者の爺さんまで我勝に前に居る北入を押退けて出やうとするので、グイと一ツ肩で小突返し。

「やい／＼後から來やアがつて何んでえッ。」

と怒鳴りつけければ爺さん吃驚して。

「ひエッ。」

と縮む、然し北入鼻ツ張は斯様強いが乗客の顔つき、容態、總ての氣分が變つて居るので、其實は心細く、例へば知らない土地の洗湯へ入つた心地、嫌にチロチロ人の見るのが癪に障つて頼りない。

やがて電車は走り出した、窓外の眺め格別のこともなく、新開氣分が漸々田になり畑になる、平凡な郊外の景色、東京で見る日暮里田端が想はれる、然し此線の自慢工事、生駒のトンネルの長さ加減は稀らしく、而して其生駒といふ停留所へ着くと、黒山に待つて居た乗客が、ドヤ／＼と潮の如に押返して割込み／＼、大阪鯨のギツチリと庖丁目もわからぬ如に、一ツ吊皮へ二人三人ブラ下つて。

『こりやあかん／＼』

『ごもならん。』

『また立通しかいな。』

と口々にボヤき立てれば。

『聖天様も聞こえまへん。』

と押されながら洒落た聲を出すのもある、北八訊くのは面倒臭いが、話の様子で察するに、生駒で名代の聖天様へ元日の初詣で、其歸りの人々と見へた。

北八の前に立つた若い男の袖口を見ると、手頸に數珠を掛けて居るこりや一寸東京では見られぬ風俗など、北八感じて居るうちに、出口の方で喧嘩が始まる。

『何吐すい糞垂れが。』

『足踏さらして挨拶もせんと何ぢやい土阿呆が。』

『言ふたが聞こえんで、どづくとは何ぢやい、其様に大切な足な』

らうちらへ置いとけや。』

『何や此餓鬼ツ。』

込んだ電車にありうちの喧嘩だが、上方同士の早言の巻舌、北八面白くなつて伸上つて見やうとする途端、前に立つた若いのに其足をギユウと踏まれた。

『あツ痛え。』

と思はず北八叫んで。

『氣をつけろいッ。』

と此方は東京振のケンノミを喰はせたが。

『こりや濟まん、堪忍しとくなはれ。』

と數珠を掛けて居るだけ素順な調子で。

『痛うおましたやろ。』

と言はれて見れば、例の鼻ツ張も出ず。

『なアに。』

と我慢して足の泥を叩きながら、

『足をうちらへ置いてくりやアよたかツたのさアハ、ハ。』

と彼方の喧嘩の言草を取つて笑へば。

『アハ、東のお方はほんまにさくいなア。』

と云つて一寸手頸の數珠を揺り上げる、北八こいつも氣味がよくない。

ごつた返す乗客の、そつちこつちの物言ひが、どれもあまへん、さうだつしやるで、中に一人の東京辯も聞き出さず、彌々遠く來た旅の空、やがて電車は大阪へ入り上本町の終點へと着いた。

さて北八、小荷物をかついで、蝙蝠傘を突いて上本町の停留所を出るには出たが、ごつちへどう歩き出したものか、てんで見當が着かず、正面左右の大通り、目まぐるしい程電車が走る、昇る人降る人、線路を駆て突切る人、北八が今降りた停留所の切符賣場の窓口には、亦黒山に押返して、而して其見上げる様な立看板に、惠方詣で生駒聖天と記るしてあつた。

北八暫らく立ッたさりで、右見左見、東京ならば上野驛へ着いた

地方客の顔付き、思附いたデブ君の長兵衛を探ねるにしてからが、矢鱈に歩き出し様もなし。

『這麼なるとまつたく心細い。』

と獨言ちる——曾根崎と聞いては居るが、その曾根崎は西か東か第一其西がどつちか、東がどつちかさへ分らない。

三方に走る電車の方向を見れば其れが亦やゝこしく、安治川行、天王寺行、梅田行、九條行、天満橋行、と讀むうち端から忘れる程變つて居る。

『こいつア亦べらぼうに口數が多いや。』

と口を開いて一々讀んで居るがさて曾根崎行といふのは見當らず

ど云つて例の訊くのが嫌で、北入唯其様して立つて居る内、奈良から氣にして居た空工合が、遂々ものになつてポツリと來た。

『オヤ。』

と情けなく空を見上げて、氣が氣でなくなり、偶と停留所から斜に見た右の角の車夫の溜りへ氣が着いて。

『オイ〜一臺持つて來な。』

と大きな聲で呼んだはい、が、知らない土地の相場が分らず。

『曾根崎まで幾干でゆく。』

と訊けば、車夫は態度を見てとりながら。

『今日のことです、一圓八十錢やつとくはなはれ。』

と來た。



「何だ一圓八十銭ッ。」

足元を見られたなと思ふと、江戸ッ兒の蟲がグイと込上げ。

「莫迦にするねえッ。」

と痰阿を切る。

「外の日やおまへん、お元日や。」

と車夫は本降になりさうな雨と往來の人足と、電車の満員と、北八のポット出の態度に痰阿ぐらひはおごろかず。

「へッ高いならしやうむない。」

と憎い言ひ方。

「糞でも喰らへッ。」

「糞よばれますかな、へ、又お出やす。」

と態笑ひながら去つちまふ、雨は彌々急速にポツリポツリ北八ままよと疝癢紛れに、出たために通りすぎる電車へ飛乗つて。

「曾根崎へ行くのはこれでいゝかッ。」

とヤケな調子で車掌に訊けば。

「こら違ひます、逆ですがな。」

「ぢや何れへ乗やアいゝんだよッ。」

と焦々しながらベソをかく

五

大阪へ入るが早いかな、間誤つきの疝癢、漸つと電車を乗直して、

今度は亦喧さいほど、車掌に訊いたり乗客に訊いたり、止りくくの電柱の文字をキヨロくど覗いて其落着かない心持、北八自分ながらポット出のどちさ加減、熟々ひとり旅はせまいものだと感じるばかり。

上本町から安治川行に乗つて、谷町六丁目で乗替へ、再々梅田で乗替へて、やつと曾根崎まで来たはいゝが、訪ねやうとするデブ君の長兵衛の住居が、何丁目の何番地か覺がないのだからたよりない雨は遠慮なく本降と来て、蝙蝠傘のシヨボく歩き。

元來物を訊くのが嫌ひな北八、其れがさんざ電車で訊いた揚句、亦訊かなければならない辛さ、其れも唯曾根崎とばかり、デブ君真

似で名は長兵衛では、訊くのも何だか變手古で、笑はれて判らずひになりさうなこと。

『少々伺ひますが。』

思切つて行違つた人を呼止て。

『變なお尋ねですが、あのウ、そのウ。』

とムズくしながら言出せば、

『へい何だすか。』

雨の降る往來中、其人は面倒臭さうに立止まつて。

『早う言ふとくなはれ。』

『あのウ、活動のデブ君にそのウ……………。』



と北八が言ひかけると、其人は呆され返ツた顔をして。
 『おいとくなはれ、阿呆かい。』
 と唾をかける如に言ひ捨て行つちまふ、北八は亦口惜くなつて、
 『チヨツ。』
 舌打しながらシヨボくと歩き出す、恰度其處は曾根崎の新地と
 見えて、色ざしの壁、家々も艶めいて、白襟の美しい妓が、褌取つ
 て塗下駄に色の爪掛、男衆に傘差かけさせてゆく。
 北八思はず見送つて。
 『フームめつぼう奇麗だが、長い面だ、彼れが上方出来なんだな。』
 と、雨の降るわからぬ途上で、這言を呟やしながら、歩いては

居るが、さてもデブ君を訊いて見る氣はぬけて居る。

すると、實に、するとだ、ヨタにはヨタな縁がある、氣の故でも夢でもない、世に稀らしい肥り方其デブ君が彼方から來るではないか、北八は思はず飛上る程喜んで泥濘をビシヨ〜と駈出しながら

『オーイデブ君ッ、長さーん。』

と息せき近寄り、顔を見上げて

『ウーム長さんだ、よく此所を歩いて居て呉れたなア。』

と北八ホットして泪汲む。

『イヨウこッこれは、さ、北さんかい。』

とデブ君、思ひもかけない此出會に、山の如な體を後ずさる程反か

へつて。

『ま、まア何うしたッてえわけだい。』

『何うしたわけッて……わけもなんにもないんだがね……何しても此所で君に遇つたのは有難い、つまり大佛様のお蔭といふものだ。』
とデブ君の反かへつた腹あんばいを懐かしく見ながら。

『デブ君、君亦肥つたね。』

『止さねえかデブ君デブ君ッて此所は色街の往來だぜ。』

『違えねへ、今チャップリンの如に而の長い藝子が行つたッけ。』

『相變らず口が悪いぜ、兎も角も僕の家へ來るか。』

『行かなくッて何うするものか。』

「アハ、呆されたお客だな、だが今僕の居る所は曾根崎ぢやアないんだ船場といふ所へ移つたのさ。」

「どこでも其處事は介はない、いゝから伴れてツて一休みさせて呉れ。」

「何しても意外だツたなア。」

「此處で旨く遇へたのはまつたく意外だツたよ。」

雨は頻りと降つて居るが、北八すつかり元氣づいて、デブ君と並んで歩きながら、彌次さんにはぐれた鹿島立ちから、道中今までの難行苦行を物語つて。

『とふわけだ。』

と息を吐き。

「何しても日本人に初めて遇つた如な氣がするよ。」

「止さねえか。」

「だつて先刻奈良からの電車の込合と、上本町の間誤つき方と來ちやア、外國に違ひなかつたね。」

「どうせ來るなら、前に僕の所へ知らせるが宜いんだ。」

「其れがさ君を訪ねるのも途中からの出來心なんだ、何しろオインと飛出した旅なんだからね。」

「心細くなると友達を訪ねるやつか、よく出來た性根だ。」

「人間は正直がいゝツてね、正直の頭に神宿るツて、争はれないも

のた出たらめに歩いて居る所へ君がニユーツと現はれたから妙だ。』

六

此デブ君の長兵衛なる人、格別北八と深いといふ程の間柄ではないが、同じ様な仕事をする仲間で東京で久しいヨタ交際、去つて四年デブ君此地へ来て居るが、氣が向かなければ便りもしないお互ひ、會つて見れば吾儘な無沙汰するだけ懐かしく、北八無暗と嬉しがつてペラ／＼と喋舌立てれば、デブ君亦體の重いだけ口は重いが其れでも同じく嬉しがつて、長兵衛は花川戸の親分に通じ、北八の八は權八の八に通ずと、いゝ氣な二人が駄洒落の出會、やがて船場の長兵衛の住居へと來た。

何は先づ、ものゝ便利は今朝半日が奈良見物、それから大阪へ乗込んで、さんざ間違つてデブ君との出會となり、而して其住居へ着いたのが、雨となつた元日の午後二時、鳥渡過ぎたばかり。

『然しまアよく來たよ。』

とデブ君行火爐の火をほじつたり、大きな體を重さうに働らかせて、床の間に風呂敷を掛た屠蘇の道具を取出すやら、船場の路次の獨住居、東京育立をこゝに流れて假の宿、机と本箱と枕時計が目星しい道具とは、氣散じの様な淋しい様な、ヤケから浮世を面白がつた様な生活、先刻まで其行火爐で寝て居たのが、ふら／＼と起き出して雨の降るのに曾根崎邊り、用でもないに出掛たもの、其お蔭で

思ひがけず、遙々と間諜ついで居た友達を拾つて戻つたといふ仕合はせ。

『へえ、デブ君、君は獨りで生活て居るのかい、こいつア乙だ。』

と北八亦嬉しがつて。

『未だ神さんが無とは大出来だ。』

とヘンな事を褒めたもの。

『人間は獨身のことだよ。』

と、北八偶々留守番の女房子を思出して、暢氣な旅にも、ツイ氣が急ぐ。

『時にデブ君、君は幾才になつたツけなア。』

『止さらせ年齢の事は、今朝で亦一ツ殖へたやつだが、獨身で居ると子供に伯父さんと言はれても自分の事ぢやアないと思ふのさ。』

『ウフ阿兄ちゃんと言はれたいやつか、時に其氣で、是から宜しく見物させて貰ひの、今夜は一ツ普通の旅宿でない所へ御案内を願ひたいな。』

『オット心得た、そこで何かい君は何日までぶらつけるンだい。』

『其れが柄にないが急ぐのさ、こゝ二三日で京都まで片附けたいのだテ。』

『そいつア忙がしいな、其れぢやア直ぐと出掛やう。』

とデブ君造作もなく起上る、

「君、家に用はないのかい。」

「ある筈がないや、行火爐へ灰をかけて置くだけの話さ。」

「なる程。」

と、北八のぞんざい者が、上には上のあるものだど感心しながら連立つて出る、雨は猶且降つて居る。

上本町へ着いてから、今まで、あの間誤つきとデブ君に會つた嬉しさで、街の様子に氣も止まらず無中で來たが、改めて出た船場の町から、北八漸く見物といふ落着いた氣分になつて。

「ねえデブ君。」

とそこらの軒並をながめながら呼びかければ。

「オイ、北さん、デブ君は助けてくれよ、其れでなくツても人が振返るんだ、これで君をチャップリンと呼びやア世話アないが互ひに東男だ、上方贅六に活動のボンチ扱ひをされ度もないぜ。」

「イヤ大きに、そんなら長さんかね。」

「かねとは何だい。」

「ヤレやかましい、それではたゞ長さん。」

「ウム。」

「此船場ツてえ所はなか／＼好い町だね。」

「大阪でも、鳥渡勢な人の住む所さ。」

「だが何だね、總體此上方の家の造りは脊ツ低だね、ケチな天麩羅

店の様にはいらをかなしみアがつてさ。』

『ウフ變な事をいふぜ。』

『夫に壁の色が芋羊羹の様だね。』

『アハ、芋羊羹はよかつた。』

『東京ぢやア見られない色だ、何となく嫌味だね、壁に嫌味がかずかずござるたア何うだい。』

『喧せへつこつた。』

『然し久し振で這麼名洒落を聞くと日本が戀しくなるだらう。』

『左様外國扱ひをするなよ、大阪の方が近頃進歩が早いぜ。』

『第一電車の方角ばかりでも東京は敵はないッてね。』

『其通りだアハ、ハ、ハ。』

船場の小路を電車通りへ出て、平野町の停留場から、恵比須行とある電車へ乗つて、だゝッ広い通りを真直ぐに、長堀橋を渡つて其れから次ぎの、日本橋を渡つて停ると。

『北さんこゝで降りるんだ、吃驚しなさんな名代の道頓堀だよ。』

『チョツおごかすなよ、何だか薄汚なくごつたついた所だぜ。』

と兎角北さん褒るのが口惜しいと云つた様な顔。

雨もどうやら小降になつた。

七

古い櫓の芝居小屋、川添ひの前茶屋、成程鴈治郎の和事にいつま

でも飽き無さうな所、興行物の軒並び、北八兼々阿母に聞く昔時猿若町の繁昌と、現今の浅草六區を一緒くたにした様な気分、雨が降つてもカアリカリと、湿ッぽくならない賑やかさ、唯總じて見る建物の古びが、北八思つて居たより其薄汚ないと感じたが、そこにまた道頓堀と云ふ名の味もある。

『芝居は當時汽車積で往くんだ、鴈治郎はんでもあるまい君を是非案内したいのは芝居裏の気分さ。』

『聞き及ぶボン屋とか一現茶屋とかいふ安い女の子の来る所かね。』
『左様心得て居ちやア、そりやアお話だけにして置く方が文句無しだ、時に腹工合は何うなんだい。』

『忘れて居たがペコペコなんだ。』

『そんなら女の子より先づ、此地の喰物屋のオツな所へ案内しやう。』

其芝居裏とある狭苦しい路次に入ると、廂を突合はした兩側に競ひ合つて小細工な喰物店、いろんな臭ひが向ひ合つてムツとさせる、表は観る物、裏は喰物、其亦間に艶つぼいのが配在する、道頓堀とは其様した所『二鶴』と染た紺暖簾、デブ君の身巾程の窮屈な入口を潜ると、料理場と昇り口と一寸區別のわからない、せしこましい真ん中を、運びの女中と下足の男と、入るお客と出るお客とぶツかり合つて、唯ワヤ／＼とした空氣が充満、突當つて左りへ昇る

と、路次側に紙長い入込みの座敷で、背後は法善寺といふ寺だといふ道理で鐘叩く音が聞こえる、斯様した賑やかな中に鐘の音のあしらはひが面白い。

『ねえ北さん、東京ならマア日本橋の花村と云つた家さ。』

『何だか知らないがよくもゴタ／＼と込合つた所だね。』

料理は盛つけたのを箱にならべて持つて来る、宜しく好きなのを取つてチャブ臺へならべながら。

『此式は上野の丸萬と淺草の天勇で心得ては居るがね、鳥渡大名にやア珍らしくツていゝよ。』

『ウム丸萬と天勇を心得て居る大名はよかつたね、されば大阪へ



來てのツけに此家へ飛込ませたなどは案内者の働きたね、然し君今に見たまへ、斯様した家へ馴染の婦か何か伴れて飲みに來るやつがあるんだから世話がないぜ。』

『へえ——。』

と云つて居る所へ、成程、鼻下に髭を刎返した洋服の紳士が、白襟で模様の襦をどつたのと、ハイカラで金縁をかけた厚化粧の氣味の悪い奥様とを伴れて大納まりで入つて來た。

『何うだい北さん、大阪の氣分は別だらう。』

『ウームこりやア東京にやア無い圖だね、元日に藝妓を伴れて入込みの飯屋へ來るのは振つて居る彼の亦奥様も奥様だぜ。』

と北八呆された顔でキヨロキヨロと見ながら言へば。

『オイ——北さん、大きな聲を出しなさんなよ……だが彼れを奥様と見る君も目が利かな過ぎるね、印度人の金指輪を眞物のつもりで買ふやつだウフ、ハハ。』

『へーえ彼りやア奥様ぢやアないのかい、尤もあの塗方はカマセ物とも思へるがね。』

『あれが所謂此地の女郎てえ代物なんだよ。』

『は、ア』

と北八感心しながら、彼方の隅へ陣取つた其三人の方を、亦加減も無しに熟々と見て、

『あれで眞晝間往來を歩けるとは不思議な土地だ。』

『人があやしまらないんだから嬉しからう。』

『東京も近頃厚かましいのが殖へては來たが、これ程にやアならな
すね。』

『だから大阪は進歩が早いといふのだ。』

『違えねへ。』

二人が喋りながらヂロリ／＼と嫌に見るので、遠が彼方も氣が
差すのか、妓二人は此方へ脊を向けて、髭の先生だけ眞正面になつ
て見返しながら。

『何やありや、よう喋る餓鬼やなほんまに。』

と此方を睨めた。

『ウフ、。』

と北八噴笑して、

『ねえ長さん、髭と上方言葉はつり合はないものだね、なつてねい
やアハ、ハ、。』

と態と一ツ莫迦笑ひをすれば。

『何やコラツ。』

と髭の先生、女の手前か頗る氣張つた、北八面白くなつて。

『長さん何うだい喧嘩をして見やうか。』
とデブ君に囁けば。

『見つともない止せよ〜。』
 彼方でも妓達が。

『あんたかまはんとちきなはれ。』

『かなはんわ』

と、ぬるたツこい調子でなだめて居る。

八

たんとも飲けない二人は、好い心持にトロリとして、芝居裏の『二鶴』を出るとゴツタ返した其細小路を、北八連れのあるだけ強くなつて、例のお喋舌り、鼻ツ張り、軒並の店々と往來の風俗を混ツ返して、土地に居るだけ聊か扣へ目のデブ君を困らせながら、やがて

千日前へと出る。

『オイ北さんこゝが名代の千日前さ。』

『嫌だな長さん一々名代々々と割書さを附けてさ、やつぱり住んで居る、土地は悪くないと見へるね、時にそろ〜日が暮るが、今夜はどんな名代へ案内して呉れるンだい。』

『左様さね、何しろどこへ行つても混ツ返しが凄いから考へるよ、

……何うだい北さん今夜は斯様いふ段取にしちやア……。』

『ウム何うでもなるよ、文句はいふもの、今此所で君に手放されたくはないからね、ひとりになると嫌に心細くなるやつさ……で其段取ツつてえのは。』

「大阪の寄席の気分といふやつが亦振つたものだからね、これから寄席へ入つて宜い加減聴いて、そこで泊りは一ツ寶塚へと申しちやア何うだい。」

「寶塚までそんなに造作なく伸せるのかい。」

「わけなしさ、つまり東京で森ヶ崎へ行くツて寸法なんだ。」

「そいつア有難い、其事々々。」

「其れで明日又大阪へ歸つて一日見物して、それから京都といふ運びが宜からうぜ。」

「萬々任せる、へッあなた任せの此體とね。」

「變な聲を出さず、元來寶塚へ泊りに行くにやア口の悪い男の子

どなんざア嬉しくないがね。」

「先刻の奥様の如なのを伴れて行くのかい、ウフ、デブ君新婚旅行の巻ツてえのが千日前で受けたツてね。」

「止さねえか、宜加減にしないとこゝらでまくよ。」

「イヤあやまり〜。」

* * * * *

是より上方の寄席気分、竹の先へ纏頭を挟んで高座へ差出す、ものに憚りツ氣のない所から、お茶子の光つた丸帯にオビヤかされオヤ〜と思ふうちに、ダークチエンヂで高座の道具が變るといふ大仕掛、客席には亦こゝにも白襟の藝子や、女郎らしい女の膝に外聞

もなく寄ツかゝつた旦那はん、北八いよく感じ入るの外なかつた。
 寶塚へ伸して亦是珍な情調に震へ、さらに戻つて次ぎの日の大阪
 見物、天王寺の塔、住吉のそり橋名物のふかし芋を珍らしがり、新
 世界巡りにはいかものを探し、其れから鳥渡花柳の氣分といふ所を
 急ぎとあつて北八大いに無念ながら、其夜の内に京都へ飛ぶ、デブ
 君からの送り状で、三條小橋の大文字屋といふ宿に着き、其翌日は
 例の車で都見物、祇園清水智恩院、金閣寺も御覽じて、オット北野
 の天満宮、西陣の暖簾も一寸覗き、東西の本願寺、一條の戻り橋、
 六條の數珠屋町、七條河原は釜ゆでの跡、聞き及ぶ名所を端から巡
 つたが、北八中で氣に入つたのは、清水を降りる八坂の塔の邊りと

栗田口から南禪寺の邊り、案内の車夫が樓門の上を指して、眞しや
 かに。

『彼の穴から五右衛門が出入りましたのや。』
 と、北八有難がるまいことか。

『時々天窓をブツケたツてね。』

など、混ツ返しと駄洒落を到る所に振散いて、滑稽の數の限りも
 ないが、二の膳重ねた旅硯、あゝモウしんど、筆を擱く。

の女めづ夫こ旅たび さあ伊い香か保ほ

良人うちのみとッてば、會社くわいしやから歸かへつて來ると、さあ伊香保いかほへ行くんだから直すぐ支度したくをしろッて突如いきなり言ふんぢやアありませんか、其それが朝あさの出い勤きんがけに何なにも言いつて行いつたわけぢやないンでせう。

『えッ』

と妾あたしが吃驚びっくりした顔かほをして居ゐると。

『何なにを愚圖ぐつぐつ々々して居ゐるンだ、さッさと支度したくをしなやか、其それから

俺おれの着物きものを出だせ、オイ早はやく出ださないか。』

と斯様かうなンでせう、さあッてばさあといふのが良人うちのみとの性分しやうぶんなのですけれども、其それにしたッておごるいちまいますわ。

女をんなッてもものはなか／＼左様さようゆくものぢやありませんわ、髪かみはコワレて居ゐるし、着物きものだッてセルを縫ぬいかけて居ゐる所ところなんでせう、困こまるぢアありませんか、ですけれども、髪かみのことや着物きもののことをいふと。

『莫迦はかッ、其それだから女をんなは嫌いやだ、髪かみも糞くそもあるもんか、グル／＼と卷まいてピンで押おさへて置おけ、誰だれが其そんな頭髪あたまを見るやつがある。』

と這麼かういふにきまづてるンです、だつて左様さようはいきませんやね、ですけれども亦また、さあッてばさあと言いはれましても、そりや嬉うれしふ

ございますわ。

それから清やに髪癖直しのお湯をとらせてる間に、良人の着物を
出して——まあ良人ッてば座りもしないでモウ裸になつてグル〜
廻つてるぢやアありませんか、ほんとにおかしくもなりますわ。

妾はセルを着て行きたいのですが、まだ出来て居ないんでせう、
だから爲方がないから御召の裕にしておいて。

『これでも宜いでせうか。』

と相談すると。

『裕だつて綿入だつてかまふものか。』

と這麼めちやくちやを言ふんですもの、妾もモウ扮装や髪なんか

何うでもいゝといふ氣になつて了つて、いゝ加減に撫つけて着物を
着替へると、ろくに清やに留守の事を言ひつける間もなく、良人は
いつか玄關へ出て。

『オイ〜帽子を忘れた取つてくれッ。』

とどなつて居るんです。

『ちや清やこれから旦那様ど伊香保へ行つて来るからお留守番を頼
むよ、いゝから。』

と斯様言ひますと、清やは留守番は馴て居ますから驚きません
が。

『伊香保ッてどちらなんでムいます。』

と訊きます。

『上州よ。』

と言ふと。

『へえーそれぢや却々大變でムいますね。』

と少し呆された如な顔をしながら。

『何日お歸りになるのでムいます。』

『さあ。』

其れは妾にわからないから、玄關の方へ向つて。

『ねえ貴郎、何日歸るんですの。』

と訊きますと。

『明日の晩〜。』

と言ひながらモウ外へ出てゆきます、其れでグン〜と電車通りの角へ出て、舌打をしながら待つて居るんです。

二

『實は會社で今日思の外の手當を貰つたんだ、其れで明日は日曜だし、急に旅行がしたくなつて思立つたんだ。』

と良人ツてば、電車へ乗つてから、妾を掛させて呉た其前の吊皮へブラ下がつて、妾の顔へ冠さる如になつて、其れでも小さな聲で這塵いふんです。

『伊香保は貴郎も初めてとせう。』

「うむ。」

「随分あるンでせう。」

「うむ。」

停車場前で電車を降りると、そりや良人の足の早い方ではないんです、随分込合つて居る旅客を押分て、さつさと切符を買つて来て。

「直ぐ乗れるンだ、グン／＼歩かないか。」

と斯様なんです。

上野驛午後四時廿分發、其れでも良人が性急ですから、少しも待たないで其汽車に間に合ふンですわね。

日暮里、田端、王子邊りは未だ左様でもありませんが、川口町、

赤羽邊りから漸々旅に出たといふ心地がして、先刻まで家で裁縫をして居たのが、ふしぎな様に思へて來ます。

菜の花は最早ありませんが、青い田甫の見晴らし、曇つた日ではあります、其れだけ景色も、汽車の中もおちついた氣分で、社の森や、田舎のお大盡らしい家のキチンとした高い生垣などを眺めますと、何とも云へない懐かしい氣がします。

熊谷驛へ來ると、良人ツて大きな御家寶を買つて、あの帶地のシンに入つて居る棒の如なのを割もしないで噛りながら、おまえも噛れツて言ふンでせう、氣まりが悪いツちやアありませんオホ。

高崎驛迄三時間かゝつたのですけれども、些も長いとは思ひませ

んでしたわ、高崎から直ぐ伊香保行といふ電車へ乗つたのですが、此電車ツたら、並等と特等と同じことで、唯シン張棒見たいなものが仕切つてあるばかりなんでせう。

同じ室内で、其棒で仕切つてあるだけですから、並等の方の乗客等と見通しですわ、其れで普通は普通だけに込んで立つて居る人があるのです、つまり悠り掛る事の出来るのが特等といふ直打なのでせうけれども、立つて居る人達を、棒一本の仕切で見て居るのは何だかお氣の毒な氣がしてなりませんわ。

『これちや却つて特等へ乗つて居る方が氣がひけていけない、實に莫迦にした電車だ、オイ〜車掌君、棒なんか脱して了へッ。』

なんて良人はポン〜言ひます、妾だつてまつたく其様思ましたわ。

電車は高崎の町をガタン〜と走つてゆきます、道巾は狭まうムいますが、なか〜繁昌な所ですね、停車場から直さの所に劇場がありましたわ、東京淺草で大好評の八木節一座ツてのがかゝつて居ました。

『イヨウこいつア面白い、降りて見たいなア。』

ツて良人ツたら大きな聲でいふんです、こんなものが大好きなのですよ、ほんとにおかしな方ですわ。

高崎の町の賑かに明るい宵を通り過ぎますと、窓外は次第に暗く

田舎道になつてゆきます、澁川へ着きますまでは、大體軒は續いて居りますが、それだつて寂しく、「金古」といふ停留場のある所で、窓外を見ますと、あやしいお茶屋の様な家があつて、その二階の窓から、夜目にも浮いて見へる様に眞白に白粉をつけた女が二三人、着いた電車から降る人でも待つ如に覗いて居ました。

『オイ／＼あれがダ、マッてンだよ。』

と、良人ツてば亦かけかまひのない大きな聲で這麼言を云ひます——よくいふ倫落の女とやら言ふんでせうか。

妾は其女さん等の顔を見て、堪らなく悲しい氣がしました、同じ苦勞する斯様した身の上の女でも、這麼田舎の、暗い窓から顔を出

して、湯治に行く人や何かの乗つた電車を見て居る心持はごんなだらうと察しると思はず泪がうかびました。

其女さん等の所へ訪ねるお客も降りず、ガタン／＼と遠く電車の過ぎて了つた後、其家の前の暗さが想はれます、然し其れでも彼の女さん達は、さつと平氣で鼻唄などを謳つて居るにちがひありません、だから妾は可憫相で堪りません。

三

澁川から電車はのろく、上りになります、曇つた夜るでちつとも景色はわかりませんが、其れでも電車のあかりが分る様に照してゆく兩側の樹々の緑が、したゝる様に青く覗かれます。

山の其緑の中を分登る電車は随分長くかゝりました。

伊香保へ着きますと、澁川で電車の車掌さんが電話をかけて置いて呉ましたので「千登勢館」といふ湯宿の若衆が、提灯を持って迎へに来て居ました。

『随分乗疲勞たらう、気分は何ともないか。』

と良人は稀らしくやさしく劬はる様に言ひます——そりや平常だつて眞當はやさしいのですけれども………。

停留所を出ると直ぐ左りへダラ／＼登りになつて、居ます提灯の灯りが歩くだけの地盤を照すだけで、外は眞暗で寂しいッてありません。

皆様がいらッしやる伊香保の避暑、夏の盛りは自然這道でも、自然賑はしい気分になりませうけれど、未だ今此地へ来ては拾で寒い氣がするのですもの。

『若衆さん、來月あたりからそろ／＼込むんですか。』
と訊きますと。

『いえまだ來月は閑暇でございます、八九が一番盛りで、モウどこでもお座敷がなくなります。』

『あゝ左様ですか。』

『道が悪ふございますからお氣をつけ遊ばして。』

『随分登りですわね。』

折れ曲つてかなりな登りです、妾は少しセイ〜云つて來ました。

『オイ手をひいてやらうか。』

と良人ッてば、突如ギユウと妾の手を引張つて。

『ヨツシヨイ〜。』

なんておかしな掛聲をしながらゆくんです、若衆が笑つてるぢや

ありませんかオホ、。

『オイ若衆、伊香保ぢやア時鳥が聞けるッてえが、もう鳴くかい。』

と良人が訊きますと。

『いえ未だ鳴きません、來月になりませんと……………。』

『さうか、僕等が來たのに愛嬌のない時鳥だ。』

良人は這麼言を云つて。

『鳴かずんば殺して了へ時鳥かアハ、ハ、ハ、ハ、ハ。』

大きな聲で笑ふと、寂しい四邊へ響きます、其響きがさらに寂しく身に沁みます。

『千登世館』といふのは登り切つた一番の上で、行啓記念旅館といふ肩書をつけた家です、其れは明治の十二年に英照皇太后がお泊り遊ばしたのださうです。

着いて見ますと成程大きい家で、通されたのは、勿體なくも英照皇太后が御寢遊ばしたといふ其記念の部屋でした。

『貴郎何時です。』

「うむ、十時半だ。」

「随分かゝりますわねえ。」

「あゝ腹が空いた、オイ姐さん何か早く喰はして呉れ、早くだよ早くだよ。」

と良人ツたら亦性急を始めます。

「何ですなあんなに御家寶を喰つた癖にオホ、ほんとに子供の様ですわね。」

「何だあんな物が腹の足しになるものか、頼むよ姐さん早くな、それから温衣を持つて着て呉れ、風呂は何方だい、オイおまえ何うする、風呂へ入つてから飯を喰ふか、飯を喰つてから風呂へ入るか……」

……………。

とそりやワイく言ふんでせう、人の善ささうな、をつとりとした姐さんは、おごろいてるぢやありませんか。

「妾はお風呂へ入つてから、ゆつくり御飯を頂きますわ……貴郎も左様なさいましな、男の癖に何ですわお腹が空いたなんて。」

「コラ莫迦を云ふな、男だつて喰はないで居て腹の空かないやつがあるかい、會社で晝飯を喰つたさきりだ。」

「妾だつて左様ですわ、晩の貴郎のお菜を何にしやうかと思つて考へて居る所へ歸つてらしつて、さあ〜とお仰つたのでせう。」

と妾は斯様言ひながら、其さあ〜と急立てられた僅かの間で、

今這麼山の温泉に来て居ることが、何だか不思議に想はれてならな
いのでした。

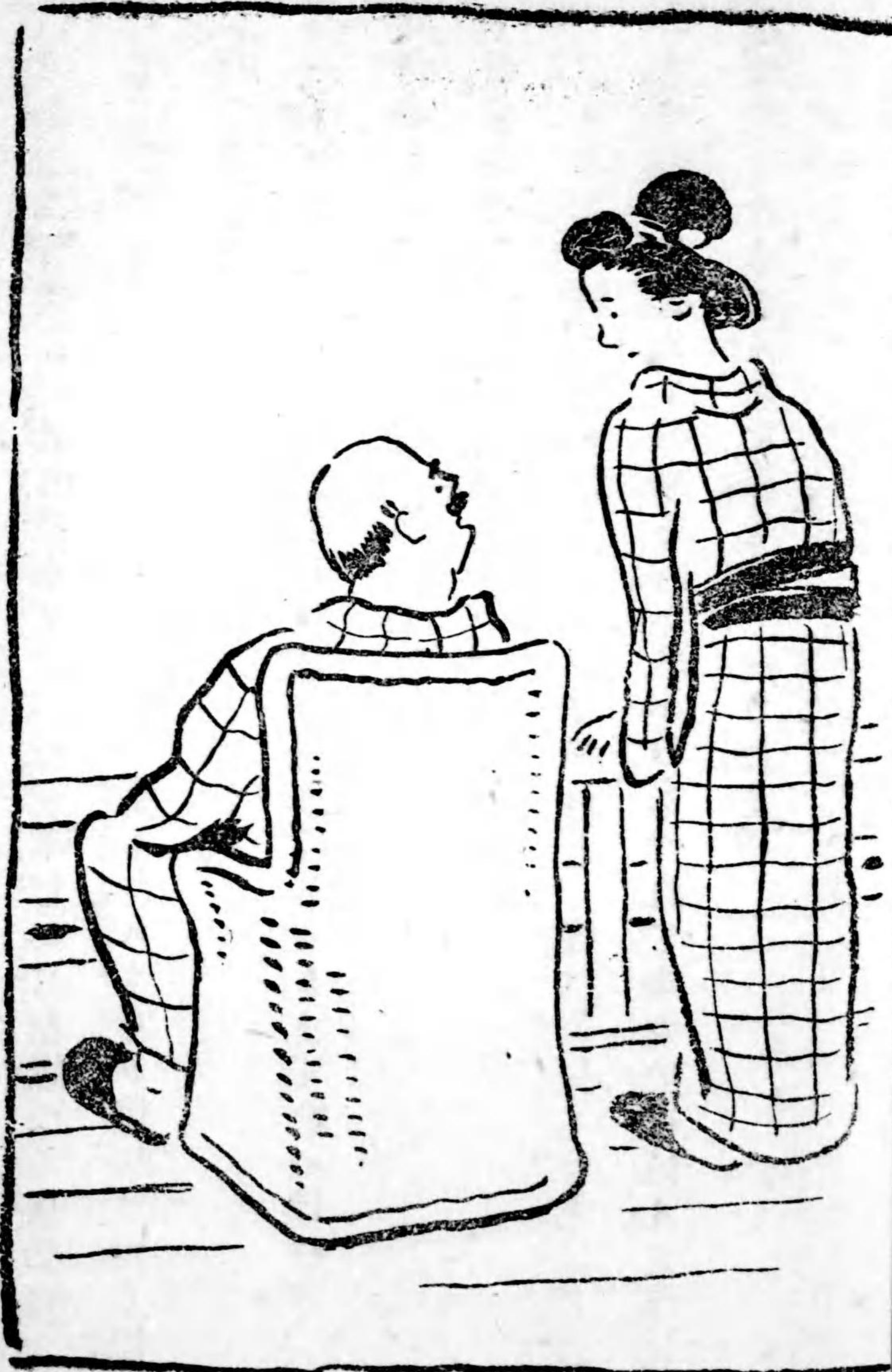
四

誰れも居ない湯槽に浸つて、湧溢れる自然のお湯のぬるい中に、
妾は唯一人、良人ツてばザブツと飛込んだかと思ふと直ぐあがつて。
『飯だ〜。』

と出て行つちまつたのですもの。

妾はゆつくりと入りながら「伊香保の湯に入ると小兒ができる」
と誰れだつたかに聞いた事を想ひ出しました。

お嫁に来て最早足掛三年、あんな好い夫を持つて、何不自由もな



く、時には斯様して遊山の旅などして、楽しい日を送つて居るのですけれど、未だ小兒のできないのが、妾も良人も時々焦れツたく思ふのです。

一日やそこらでは伊香保のお湯の利き目もありますまいけれど、其れでも萬一ひよつとできたらば何うでせう。

そりやできないとは限らない。

良人は男兒ばかり欲がつて居ますけれど、妾は女兒も欲しふございますわ、此次こゝへ来る時には小兒を伴つて來たい、ほんとうに左様だツたらごんなに嬉しいでせうねえ。

お湯からあがつて、良人に這麼話をしますと。

『そんな旨いわけにゆくものか。』

と笑はれて了ひました。

明る朝、いつもはせがむ様にしなくつては起きない良人が、まあ何うでせう、妾よりも早くから起き出して、廊下へ出て、椅子に腰を掛けて卷蓑なんか吹かして居るぢやありませんか。

妾は、もう其前から目は覺て居たのですけれど、あんまり早過ぎると思つて寝たふりをして居りましたの、すると良人ツてば。

『オイ、起きろ、ねぼすけだなア。』

なんて起すのでせう、ほんとにちかしくなつちまいますわ。

お天氣はヤツぱり曇つて、霧が下りて居ますので直ぐ眼の下湯

宿の屋根だけしか見えませぬけれども、其コケラ葺を竹でおさへた家根々々を見ながら、霧晴れの時の景色を想ひまして、良人と二人で二階の高欄に倚つて居る心地は何とも言へませぬ。

それから、妾共には湯治場でなくては入れない朝の風呂、すがすがしい、氣持になつて梅干でお茶を頂く其旨さ。

朝の御飯が濟みますと。

『さあさ見物たく。』

と良人は宿の温衣の儘兵古帯をチョコンと結んで、帽子をあみだにトボケタ格好、妾は洋傘を杖にしまして、七重の瀧といふ箱庭の様な景色から、山路の道知るべをたよりに、さんざ歩き巡つて、溪

を渡つて湯元へ出て、流れの煙る湯の小川、新緑を彩るつゝじ山吹のところく、疲勞ると手をひかれてオホ、い。

新婚の旅の其時は唯夢の様でしたけれど、今度の旅には、より深い實味がこもつて居りました。

子を伴れて来る後が、亦想はれます。(をわり)

藝者と
お客と
避暑々々話

「何處か涼しい所へ伴てッて頂戴よ、二三日でいゝわ貴客。」

「丸鬚を結ふかい。」

「そりや結ふわ、何も氣兼ねする人があるわけぢやなし。」

「巧くいふぜ、其代り玉代がつくから世話がないや。」

「だつてそりや爲方がないわ、自前で居る體ぢやなし。」

「自前になりやア俺なんぞに用はなしな。」

「あら、貴客左様思つてるの。」

「あゝ左様思つてるよ。」

「随分ね」

「随分ねッていふが、まさかおまえに丸鬚を結はせて、厭に氣取つた旅行をしやうとなつちやア汽車は三等といふわけにもゆかず、旅宿のお茶代だつてお帳場へ二圓も出せまい。」

「いやアよ其麼ケチな言を云つて……。」

「だから、其れが出来ないから考へるのさ、其上におまえの玉代祝儀ど来るンだらう、算盤が持てなくならア、亦其うちにしやう。」

「いやアよ。」

「此方がいやアよだ。」



『伴つれてフて呉くれなけりやよくツてよ。』

『よくツてよと來きたな、よくツて何なうするんだい。』

『行いかないまでよ。』

『なアる程ほど話はなしがわかつてゐる、然しかし行いきたいんだろ。』

『行いきたいツたツて、伴つれてツてくれなければ行いきたかなら。』

『行いきたかないツたツて、行いきたいのだらう。』

『もう喧うるさいわ。』

『怒おこんなさんな、伴つれてツてやるから。』

『よござんすよ。』

『まつたく伴つれじくんだよ。』

『玉代と祝儀が附きますよ。』

『失禮な言をいふなよ、成金に對して。』

『ぢや何故今ケチな言を云つたの。』

『そりやそこが實業家だからね、もし負かるなら負て貰ひたいと思つてね。』

『お止なさいよ見つともない。』

『あは、ところで何處へ行きたいのだい。』

『何處でも。』

『おまえとならば何處までもか、オヤ箱根山、白糸瀧の中までもラッ………。』

『ケチな言を云はなければ、くだらない唄を唱ふのね。』

『其れが當世流行のお客だ。』

『あ、情ない。』

『箱根が宜いだらう、山の方へ電車が開通したつてえから。』

『いやよウ、あんな氣味の悪い電車なんか。……此間試運転の時に脱線したつてぢやないの。』

『そこが嬉しいんだ、脱線結構、あつち有難い、巧まずして思つた女ど心中が出来るつてね。』

『いやよ、電車脱線心中なんか野暮だわ、第一貴客が對手ぢや納まらないわ。』

「勝手にしやがれ、色男の總本家に對して、よく恐れもなく云へたものだ。」

「恐れるから言ふんだわ。」

「此方で下手に出てゐりやア圖に乗やアがつて、もう頼んでも心中してやらないぞ。」

「都合に依れば頼むわ。」

「いゝ様にしろよ。」

「焦ッたい何處へ行くの。」

「伊香保も宜いが、高崎から先の電車が嫌だなア。」

「脱線しないから詰らないの。」

「ウフ、左様よ、鹽原、那須、ちと遠いなア、飯坂、東山は猶遠

スシよ。」

「修善寺が宜いわ。」

「修善寺は割合に涼しくないぜ。」

「何うせ貴客と一緒に涼しくはないわ。」

「つまり熱い中だからか。」

「およしなさいよ、ベラ／＼喋舌るから喧さくツて熱いのよ。」

「其れでケチな言ばかりいふから汗が出るんだらう。」

「其通りよおほい。」

「此奴めツ……第一行きたいのか行きたくないのか。」

「行きたいのよ。」

「そんなら混ッ返すな」

「貴客もムダを言ひッこなし。」

「然し考へると行く所もないな。」

「あるわ、箱根で好いんだわ、塔の澤で結構よ。」

「あすこは俗で嫌だ、電車へ乗つて強羅邊りまで行くんなら兎も角も。」

「御免蒙るわ。」

「ぢや止すかな。」

「止す方が宜いわ。」

「儂後口がかゝつてるんだから歸るわ。」

「さうかそいつア残念だが、其れぢやア又の事にしやう。」

「左様なら。」

「左様なら。」

是れより左り作者自分の旅

何も道知るべをして書かずとも、作として描くトボケた人間と、作者自身の失敗の多い旅姿と、別に變らう筈もないが、然し亦當人ムキ出して書く所は、つまり其の商人ならば元値で願ひますといふやつ、唯其代り元直商ひなるが故に、少々品物の古い所は御勘辯へエ、と、揉手をしながら爾云ふ。

三 同行 那須のなまづ記

旅の日取は短かいが、どこのこののと相談の長いこと、尤も其相談といふものが、冗談と駄洒落を差引と、正味がないくらひなもの。

が亦然し、駄洒落の中からフイツと好い智恵も出る、それ好い智恵の與市の的、那須野ヶ原へ飛去りはどうだい、オット宜からう決まつたりとなつては、もう矢も楯も無い急尾の變化、飛んだ宙乗のアーリヤくと、野干ましい勢子の割竹、頭領は思案大人、鶯塘阿兄、さてそれがしの三人連れ、時は大正五年七月三十日午前九時三十分上野發。

生憎に雨コン／＼のふる狐 コンよくも洒落ながら、那須野をさ

してゆく空の——と、斯様書き出しから駄洒落てゐては、先づ自分からあてられる茄子の生づき、お話は下野へ下り列車。

『あゝ行先が思ひやられる。』

と思案大人のモノ／＼しい溜息に汽笛をかぶせて。

『何うも黙つて居られません。』

と斷つて取かへる。

雪駄からかさ下駄あしだ、幸手栗橋古河間々田と、昔から地口で通り名の驛々を通り越し。

『おやまア暫くと脊中をうつのみやなどは何うでげす、地口にして亦川柳も兼ます、何と點にはなりませんか。』

『ウフ到底てんきになりさうもないよ。』

と鶯塘阿兄、窓外を眺めながら、途中で買った瓶詰正宗の喇叭をさめてる。

筑波は雲に、雨の田甫、どこまで行つても同じ景色。

『成程なあ、雨の降る日と日の暮方は、田舎も東京も同じこと、とは太田道灌よく詠んだ。』

なごい、變なヨタを飛ばして居ると、汽車の方も變な名のほうしやくしといふ驛を通る。

『イヤ、うつかり吐くのは勿體ない程の名洒落が出来ましたよ。』と云へば、思案大人發止ととめて。

「オツと勿體なきやア吐きなさんな、大助かりだ。」
と避けられては、サテむづ／＼する。

「もし／＼何うか聽いて下さる。」

「チョツ喧せへな。」

「今通つた驛で一ツ、宜うがすか。」

「やつさと言へよ。」

「エヘン、ほうしやくし見て来た如な嘘をつきとね。」
ものゝ五時間喋舌通して、やつと黒磯へ着きにけり。

二

浴衣がけのぞんざい姿、浮世を假の忍ぶ摺、鶯塘阿兄の尻端折、

腰に合財袋を結んだ圖などは、胡麻の灰がタヂ／＼と後へ下つて、
先づそれがしの夏外套の方へ目を着けやうか、ところが其亦外套の
下は裸襦袢といふ見かけ倒し、何れも曲つた足駄履きで、其着きに
ける黒磯の、かばこやといふ旅籠の一息にも、番頭クン自動車とは
薦めず、是より那須の湯本まで四里何丁、一人前金六十銭のガタ馬
車へお召に相成らうといふ次第。

さて此馬車たるや珍型にて、普通の車體を胴切にした眞四角、雨
除とあつて綿フランの汚れたのをかけた具合、お三ごんの腰巻も斯
やとばかり、頗る以て有難い氣持、馬はトゲ／＼と瘦たのが一頭。
「それツ野郎、シツ。」



と御者クン一鞭入れると、ガタ、ガタ、ガツタンと動き出す。
 雨は彌々強降に、風さへ加はり、ザア〜ヒュー〜と綿フラン
 を横なぐりにあほり立てる。

黒磯を出た三人の悪漢、愈々那須野ヶ原へ差懸るといふ光景なり。
 黒磯より約十一二丁、難かしく言へば瞰下幾丈、河底遙かに岩せ
 く流れ、水聲轟々と鳴る所、これを渡りの晩翠橋、此板橋馬車が危
 ないとおドカされ、鳥渡降りて下さいと来た、是非なく降りて濡シ
 ヨボタレながら此橋を渡る。

再び馬車に乗る、ガタ、ガタ、ガタクリンと、道は其れより爪先
 上り、然し四邊は何にもない平木の平野、晴れならば遠く那須嶽の

我等の一行を、イヨ一来たなど迎へもしやうに、行先は唯雲、唯原唯原。

松子、田代、守子坂と、立場の息つき雨の降るのに悠々と焦れツたく、漸く走り出すかと思へば、何しろ此頃降續く長雨に途の泥濘右にガタクリ、左りにガタクリ、車輪を没して、其動搖容易ならず低い天井で天窓をゴツン〜。

『旅は憂いもの痛いもの。』

『これさ、アツ痛ツ、洒落どころから。』

と情けながる。

もう湯本へ程近い、仕舞ひの立場の小憩に簞鷺の片言を聞く。

此邊りに日は暮れて、霧の煙りに重い雨の、矇ツとした中に、夢の様な淡い灯影が點々と見へる、湯の香人の香、ごこともなく賑はしく、懐かしい四邊の氣配、湯の町といふ氣分が漂つて來た。

三

湯本の宿は松川屋、されども此宿を初めから決めた譯でもなく、思案大人が出立前に鳥渡誰れかに聞いたゞけのこと、此所で好いのは小松屋に松川屋、その何れかどの當だツたが、黒磯のたばこやが松川屋の支店を兼た縁つゞきの爲め、自然茲に松川屋と決まつて了つた型。

尻端折に、縹緋に外套、綿フランをひるがへした馬車から、シヨ

ポ／＼と降りて、松川屋の玄関へ昇つた所、どう見たツて好いお客ぢやアない。

何も、知れて何うといふ程、むづかしい身の我々ではないが、忍べは一層旅の氣儘、中にも強者鶯塘阿兄に於ておや、那須野ヶ原の古狐を亡しくれんづ息込みに、ごこの誰だか白ばつくれて懸つたはい、が、昇るが早いか宿の女將さん。

「石橋さんに、武田さんに、森さんでいらッしやいますか、お座敷も取つてございます、何うぞ別荘の方へ。」

と来た、突如放つた矢先の鋭さ、胸元にヒューツとばかり。

「オヤ／＼／＼。」

と顔見合はせ。

「ウームンこいつは驚いた。」

「誰れが知らせたんだらう。」

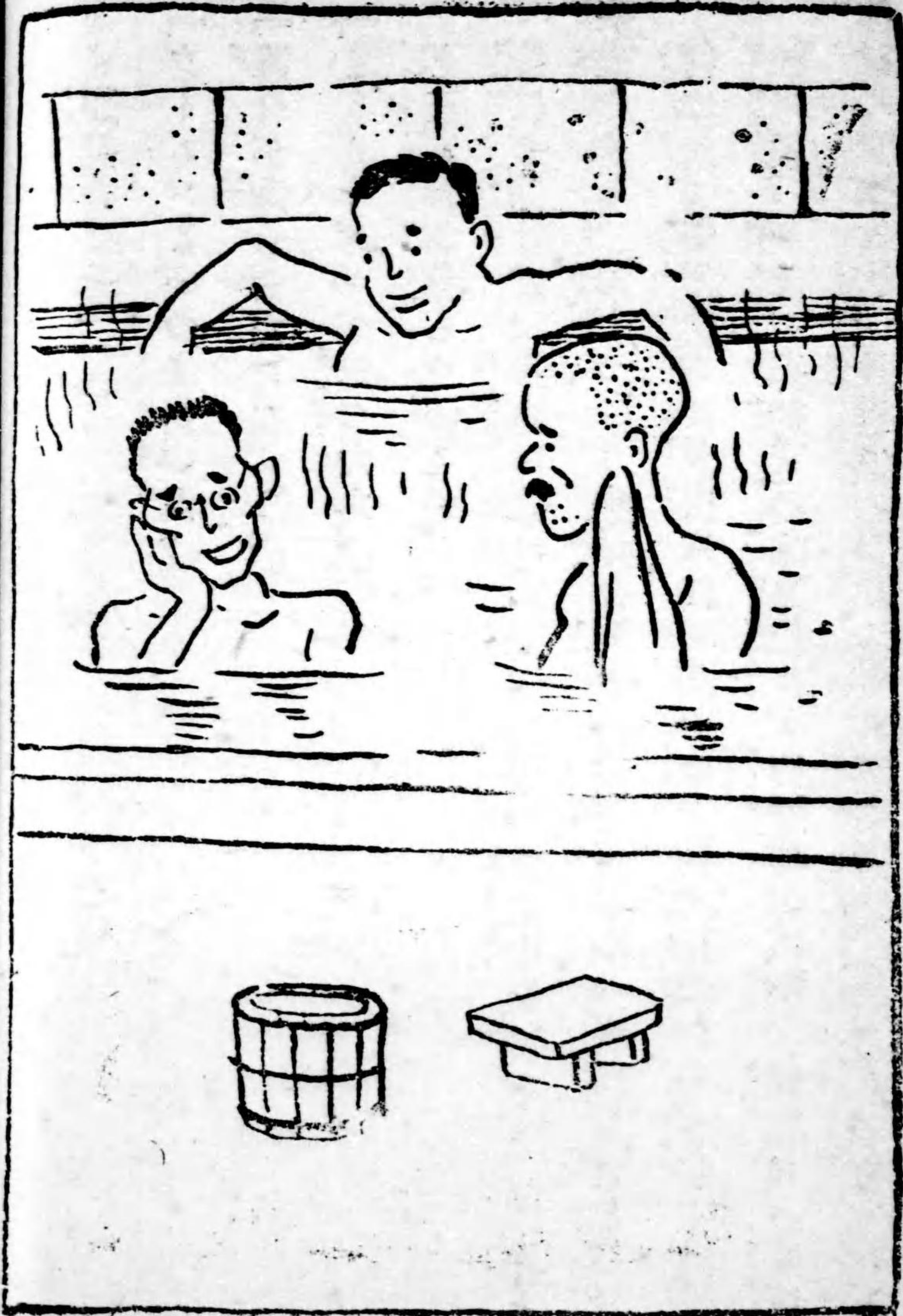
「どう／＼ズキが廻つたか。」

と三人萎氣返るまいことか。

後に聞けば、東京の誰れかど、我等の此道中を知つて、此宿と馴染のまゝ、當ずつほう半分前觸れの茶目をやつたのだとある。

何は先づ斯様忽ちに見出される様では、到底悪漢の資格なし。

松川屋の別荘、御約束の眺望絶佳、四層樓の十疊、隣室には家庭伴れの無事な客、長逗留のつれ／＼に琴の調べ、コロリンシャンと



襖漏る。

茲に於てか、愈々神妙にせざるべからず、病後禁酒中の思案大人、
 元來生下戸の僕などは、要するに駄洒落さへ慎しめば、何うやら静
 かにはなるものゝ、鶯塘河兄に至つては、汽車中の喇叭飲みに、下
 地にほろりと氣のあるだけ、彌々晩酌に二三本倒さずしては納まら
 ず。

温和しく、隣の琴の音を合方に、飯を喰ふ二人を向ふに廻してグ
 ビリ／＼、次第に酔つて来る、時に阿兄曰く。

『そろ／＼面白くなつて来たぞ。』
 と唇を嘗める、眼を据へる。

『オイ／＼始まつたぜ。』

と二人は密かに眼顔で言ひ合つて、イザとなつたら酔拂ひおどろかずといふ覺悟はあれ、往きの洒落攻と馬車の揺れに思案大人もすつかりへコタレ、それがしとてもグツタリもの、此場合鶯塘阿兄に面白くなられては、聊か始末がつけかねる。

『阿兄寝やうぜ。』

などと言つた所でムダな話 酔ふ程に得意の蠻聲一番。

『こらアオイツヒエーツ。』

とどなる、忽ち隣室の琴の音は止む、小兒が泣き出す。

『イヤ面白い／＼。』

と阿兄飛上るよと見れば、やがてフラ／＼と廊下へ出て、どこかへ去つたり。

思案大人と顔見合はせ。

『どこかへ行つたな。』

『何か退治る氣と見へる。』

『彼れは實行する男だ。』

『ウーモン。』

と結局二人は、彼の勇氣と勢ひに、感心せざるを得ざるなり。

四

鶯塘阿兄若し改まつて先生たる本業に返りこれが紀行なんど書く

ならば、曰くこゝにも淪落の女あり——など、嘆ずべし。
飛出して行つた先方の活動振りには、茲に我等の知る所でないが、
此方は思案大人と二人引込んで居た口惜しさに、一寸其れだけを素
破抜いて置く。

尤も、鶯塘豪傑狐退治の不在中、思案大人と相談一決。

當旅行中鶯塘子禁酒の事と。

翌朝思案大人鶯塘阿兄を捉まへて、嚴かに其旨申渡せば。

『どうかハヤ、ビールだけは御勘辨、これさ暁紅、友達がいがな
ぜ、とんだ事を決めたものだ。』
と怨めしい眼の色。



全體我等の旅といふもの、唯わけもない氣儘が本意、景色を問ふでもなく、湯の効能を知らうでもなく、イヤ効能どころか、効いては何れも兇狀持の、どこへ何う罪の報ひが破裂せまいものでもない、折角無事に見へる體の表懸りを臺無しにしては取返しがつかないと、ドブンと飛込むかと思へば、ヒヨイと飛出して、側の浴客をおどろかせ、さうしては場合嫌はずの駄洒落なり。

然し僥倖は其翌る朝、がらりと晴れた好い天氣で、此松川屋の、四層樓は眺望絶佳とある看板通り、湯本の村の朝煙りが、霧が退いた濡た家根々々へ、心持よく立昇つて、遠く黒田原、黒磯邊りを見渡し、何とも言へずスガ／＼しい。

『これで今朝迎へ酒と來りやアなあ。』

と鶯塘阿兄は愚痴をいふ、尤もとは思ふもの。

『いけなすよ。』

と思案大人はどこまでも嚴かなこと。

『爲方がない、がまんするさ。』

とそれがしも、同情する様な、同情しない様な言を云つて。

『オイ其れよりは出掛やう。』

と、飲まないど河童が陸の様な鶯塘阿兄を引立て、松川屋を出る。其別荘の表口を出て、左りへ繁みの間をダラ／＼と登る、石の鳥居の一二を潜つて二丁程の突當り、そこが那須温泉の守護神、即ち

温泉神社とあつた。

案内なしの的なしに、何處へともなく其湯の神の裏山づたひ、草叢の露を分けて、道のあるまゝに抜けて下ると、眼界は忽ち不思議な氣分に展かれた。

硫黄山の切落し、砒臭が呼吸を壓するばかり、草木は生さず、飛ぶ鳥は落やう、たゞ見る山間の焼野原、石疊異色に重ねて踏途もなく、宛然地獄といふ感じがする、訊きもせずに来て、此異境に入る、之那須野ヶ原の名所、岩石落す幾節の流れの彼方の、小高き所に見る碑は、即ち殺生石に詠む蕉翁の句。

飛ぶものは雲ばかりなり石の上

とある。

殺生石を圍らせた柵の破れに、玉藻前の姿も想はれる、昔時を語り疲れた如に、眠れる石が物凄い。

五

硫黄の石の凸凹な野原の中を、流れに添ふて二三丁戻れば、湯氣に古びた板小屋の風呂、脱衣の茶屋を覗いて見れば、碁を圍む老爺やら、亦風呂を覗いて見れば、田舎の婆さんやら娘やら、硫黄の湯氣にもや〜と賑はしい、地獄の景色を脊にしてこゝには人の極樂とも想はれる、これが那須野の元湯なのだツた。

此元湯から道を通して温泉町へ三四丁、一先づ松川屋へ立戻る。